

# こころの清流を求めて

—上座部仏教比丘たちのご指導による日常生活の中の仏陀の教え—

パーリ語

## 『ダンマパダ』

その（一）

協力・監修 ウ・ウェーブツラ大僧正

編集・発行 北嶋 泰観

## <増刷について（増刷版は価格未設定の無料配布版）：2024年10月>

北嶋泰観先生が1992年頃から出版・販売（当時は有料販売）されていた「ダンマパダこころの清流を求めて」（1巻～5巻）を譲り受け、『この素晴らしい聖典』を、無料で施本としてお配りする活動をさせて頂いております。

現在、2024年10月現在、こちらで把握している在庫（一部のみ）では、「1巻0冊、2巻262冊、3巻206冊、4巻653冊、5巻516冊」です。そこでこの度、1巻を300冊増刷いたしました。（2024年10月増刷を実施）※他、上記以外の未知数の在庫（同数程度と推測：詳細不明）がございますが、保管スペースの制約の都合があり、段階的な在庫把握の実施となります。※残在庫は、順次、段階的に不足分を増刷し次回以降無料配布予定：時期未定

上記、把握している在庫の「3巻の206冊を基準」に、「206セット（5巻で1セット）」を施本にて、今回（2024年10月から）お配りさせて頂く予定です。※こちらは構成として、2巻～5巻は従来の価格が設定された旧版、そして、それに加えて、この増刷版（1巻：価格設定なしの無料配布版）と混在した形で、1セットで、206セットを施本として無料でご提供させていただきます。

また他に、元々販売されていた全て価格が設定されている旧版だけの1セット（1巻～5巻）の一部を、当初「一部は販売し増刷資金に補充」「市場に流通させれば、我々の活動範囲を越えた方に広まる」「それも広めることとなる」と考え、全て価格がついた20セットほどは保管し、販売も検討しておりました。しかしながら、検討のみにとどまり、販売は一切実施せず、この度、これらの本も施本として、無料配布にてご提供させて頂くことと致しました。

したがって、「増刷版を含む206セット」+「旧版だけの20セット」→全部で、『226セット』を、この度、お配りさせて頂く運びとなりました。この『素晴らしい聖典』を、是非ともご友人・ご法友にご紹介頂けますと幸いです。無料にてご提供させていただきます。よろしく願い申し上げます。

ダンマパダこころの清流を求めてを広める会  
(問合せ先) kokoronoseiryu423@gmail.com →



## は し が き

長い間、正しく仏教を理解するためには、スリランカ・ミャンマー（旧国名ビルマ）・タイなどの上座部仏教（Theravāda Buddhism）のパーリ語経典を学ぶことが常識であると言われていました。その中で、特に「ダンマパダ」（Dhammapada）は1855年、デンマーク国の言語学者ファウスベル（Viggo Fausböll）がラテン語訳で出版して以来「東方の聖書」と呼ばれ、世界中で今もなお翻訳され続けている知識人必読の仏教書であります。

日本の著名な仏教学者の先生方も、『ダンマパダ』（日本では『法句経』と呼ばれている）は、仏陀がじかに説いた真理の言葉として、日常生活の智慧を教え、かつ人生究極のあり方を示す、大変重要な仏教書の一つであると、述べられております。

本書は、スリランカ国のナーラダ大僧正著とミャンマー国のビルマ・ピティカ・アソシエーション発行の『ダンマパダ』、そして、米国のハーバード大学東洋シリーズ『仏教伝説』（第28・29・30巻）を基礎資料に、学術的見地からではなく、一般の人々も気軽に読めて、理解しやすいことを念頭に、日本に來られた上座部仏教の比丘（ビク）の方々のご指導ご協力を得た結果、第一回出版として『ダンマパダ』全423偈の中の第1偈から第61偈までを発行するしだいとなりました。

尚、多くの人々がそれぞれの角度から『ダンマパダ』に親しめるように、口語訳、パーリ原文、英訳、背景となった物語の要約という順に並べ、配慮致しました。そして、深い理解に導くための専門的な事項も若干挿入致しました。

本書が、少しでも皆様のお役に立つことになれば嬉しく存じます

1992年7月1日

北 嶋 泰 観

## 目 次

はしがき	1
目 次	2~4

### 第一 対 [句] の章 (Yamakavagga)

第1偈	チャクパーラ長老 (The Story of Thera Cakkhupala).....	1
第2偈	マッタクンダリー (The Story of Matthakundali).....	2
第3・4偈	ティッサ長老 (The Story of Thera Tissa).....	4
第5偈	人食い鬼 (The Story of Kālāyākkhint).....	5
第6偈	コサンビーの比丘たち (The Story of Kosambi Bhikkhus).....	7
第7・8偈	マーハーカーラ長老 (The Story of Thera Māhākāḷa).....	9
第9・10偈	デーヴァダッタ (The Story of Devadatta).....	11
第11・12偈	サーリプッタ長老 (The Story of Thera Sāriputta).....	13
第13・14偈	ナンダ長老 (The Story of Thera Nanda).....	15
第15偈	チュンダスーカリカ (The Story of Cundasūkarika).....	19
第16偈	ダンミカ・ウパーサカ (The Story of Dhammika Upāsaka).....	20
第17偈	デーヴァダッタ (The Story of Devadatta).....	21
第18偈	スマナディーヴィー (The Story of Sumanadevi).....	23
第19・20偈	二人の友達 (The Story of Two Friends).....	24

## 第二 不放逸の章 (Appamādavagga)

第21・22・23偈	サーマーヴァティー(The Story of Samāvati) .....	27
第24偈	ある「金貸し」の息子(The Story of Kumbhaghosaka).....	31
第25偈	チューラパンタカ(The Story of Cūḷapanthaka) .....	33
第26・27偈	バーラナッカッタ祭り(The Story of ..... Bālanakkhatta Festival)	34
第28偈	マハーカッサパ長老(The Story of Thera Mahākassapa) .....	36
第29偈	二人の比丘(The Story of the Two Companion Bhikkhus).....	37
第30偈	マガ青年(The Story of Magha) .....	38
第31偈	ある一人の比丘(The Story of a certain Bhikkhu) .....	39
第32偈	ニガマヴァーンティサ長老(The Story of Thera..... Nigamavāsītissa)	40

## 第三 心の章 (Cittavagga)

第33・34偈	メギヤ長老(The Story of Thera Meghiya) .....	43
第35偈	ある一人の比丘(The Story of a Certain Bhikkhu) .....	45
第36偈	不満のある一人の比丘(The Story of a Certain ..... Disgruntled Bhikkhu)	48
第37偈	比丘サンガラッキタ(The Story of..... Thera Saṃgharakkita)	49
第38・39偈	チッタハッタ長老(The Story of Thera Cittahattha) .....	51
第40偈	五百人の比丘(The Story of Five Hundred Bhikkhus) ....	54
第41偈	悪臭のする長老(The Story of Tissa ..... , the Thera with a Stinking Body)	58
第42偈	牛飼いナンダ(The Story of Nanda, the Herdsman) .....	60
第43偈	ソーレッヤ(The Story of Soreyya) .....	62

第四 花の章 (Pupphavagga)

第44・45偈	五百人の比丘たち (The Story of ..... Five Hundred Bhikkus)	63
第46偈	蜃気楼と比丘 (The Story of the Bhikkhu who ..... Contemplates The Body as a Mirage)	66
第47偈	ウィタトーバ王子 (The Story of Viṭatūbha) .....	67
第48偈	パティプージカ・クマーリ (The Story of ..... Patipūjika Kumārī)	69
第49偈	ある貧しい「金持ち」 (The Story of Kosiya, ..... the Miserly Rich Man)	70
第50偈	裸行者パーウェツヤ (The Story of ..... the Ascetic Pāveyya)	73
第51・52偈	在家の人チャッタパーニ (The Story of Chattpāṇi, ..... a Lay Disciple)	74
第53偈	ヴィサーカー (The Story of Visākhā) .....	76
第54・55偈	アーナンダ尊者の問い (The Story of Question Raise ..... by the Venerable Ānanda)	81
第56偈	マハーカッサパ長老 (The Story of Thera Mahākassapa) .....	82
第57偈	ゴディカ長老 (The Story of Thera Godhika) .....	84
第58・59偈	青年ゴラハディナ (The Story of Garahadinna) .....	85

第五 愚者の章 (Bālavagga)

第60偈	ある男 (The Story of a Certain Person) .....	89
第61偈	マハーカッサパ長老の弟子 (The Story of a Resident Pupil ..... of Thera Mahākassapa)	91

あとがき .....	94
参考文献 .....	95

Namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddhassa.





## 第一 対[句]の章 YAMAKA VAGGA(THE TWIN VERSES)

1. 心こころに関するかんすべてのものは、心こころが先立ち、心こころが  
主ぬしであり、心こころより成なる。人ひと、汚よごれた心こころで話はなした  
り、行おこなったり、考かんがえれば、荷にぐるま車をひく牛うしの足あしを  
追おう車輪しゃりんのごとく、苦くるしみ、その人ひとに従したがう。

Manopubbaṅgamā dhammā / manoseṭṭhā manomayā  
manasā ce paduṭṭhena / bhāsati vā karoti vā  
Tato naṃ dukkhamanveti / cakkamva vahato padaṃ

All mental phenomena have mind as their forerunner: they have mind as their chief; they are mind – made. If one speaks or acts with an evil mind. Suffering “*dukkha*” follows him just as the wheel follows the hoof – print of the ox that draws the craft.

- ※一人の信心深い中年男チャクパーラ (Cakkhupāla) が出家して比丘となった。たゆまぬ努力の結果、比丘は、悟りの第四段階である阿羅漢果(Araham)を得たが、不幸なことに、その時、盲になった。  
ある夜、回廊をゆっくり歩きながら瞑想をしていた盲目の比丘チャクパーラは、知らずに虫を踏み殺してしまい、仲間の比丘から不殺生の戒律を犯したと仏陀に訴えられた。

しかし、仏陀は、故意に虫を殺したのではないという理由からこの比丘をお許しになった。

そこで比丘たちは、「何故、比丘チャクパーラが悟りをひらいたのに、盲になったのか？その原因をぜひ知りたい」とたずねた。

比丘チャクパーラの前世は医者であった。そして、一人の目の悪い貧しい女性に薬を与えていた。それには条件があり、もし、視力が回復すると、女性とその子供たちは医者への召し使いになるという約束があったのである。

しかし、心から望んだ約束でないため、女性は逆にだんだん視力が落ちていく芝居をした。これに怒った医者は、別の薬を与え、彼女を本当の盲にした。これが、比丘チャクパーラが盲になった原因であると仏陀は述べられたのである。

(第1偈の因縁物語)

2. <sup>こころ</sup> <sup>かん</sup> 心に関するすべてのものは、<sup>こころ</sup> <sup>さきだ</sup> <sup>こころ</sup> 心が先立ち、心が  
<sup>ぬし</sup> <sup>こころ</sup> <sup>な</sup> <sup>ひと</sup> <sup>きよ</sup> <sup>こころ</sup> <sup>はな</sup> 主であり、心より成る。人、清らかな心で話し  
たり、<sup>おこ</sup> 行なったり、<sup>かんが</sup> 考えれば、<sup>ひと</sup> <sup>かげ</sup> 人に影がそうご  
とく、<sup>たの</sup> 楽しみ、そのひとに<sup>したが</sup> 従う。

Manopubbaṅgamā dhammā / manoseṭṭhā manomayā  
Manasā ce pasannena / bhāsati vā karoti vā  
Tato naṃ sukha manveti / chāyāva anapāyini

All mental phenomena have mind as their forerunner: they have mind as their chief; they are mind – made. If one speaks or acts with a pure mind, happiness “*sukha*” follows him like a shadow that never leaves him.

※アディンナプッバカ (Adinnapubbaka) というバラモンの一人息子マッタクンダリ (Maṭṭhakuṇḍali) は、病気で長い間苦しみ続け、すでに死の一步手前であった。

というのも父親がたいへん「けち」で、息子の病気が手遅れになるまで一度も医者に見せなかったのである。この悲惨な状態を感知した仏陀は、その息子を救うために会いに行かれた。

瀕死の息子は、じっと仏陀の姿を見ると、大いに喜び、その喜びの気持ちのまま息をひきとり、三十三天界 (Tāvātimsa) に生まれ変わった。天界に生まれた息子は、墓の前で涙を流して悲しんでいる父親の哀れな姿を見て、何とか父親を救ってやりたいという気持ちから老人の姿に変身して天界から人間に降りて来た。そして、「自分は死後、天界に生まれ変わった」と告げた。突然、目の前に現れた老人から「死んだ貴方の息子です」と名乗られた父親は、たいへんびっくりした。

しかし、その老人の声が死んだ息子の声にたいへんよく似ているので、だんだん信じるようになった。やがて、父親は、息子のアドバイスにしたがって、仏陀と比丘たちを家に招待してたくさんの御馳走を施した。

(第2偈の因縁物語)

3. 「<sup>かれ</sup>彼は<sup>わたし</sup>私を<sup>ののし</sup>罵り、<sup>たた</sup>叩き、<sup>う</sup>打ち<sup>ま</sup>負かし、<sup>わたし</sup>私<sup>の</sup>ものを  
<sup>うば</sup>奪<sup>き</sup>い去ってしまった」と、<sup>うら</sup>そのような<sup>うら</sup>怨みを  
<sup>も</sup>持<sup>つづ</sup>続ける<sup>ひと</sup>人たちに、<sup>うら</sup>怨みの<sup>しず</sup>鎮まることはない。

Akkocchi maṃ avadhi maṃ / ajini maṃ ahāsi me  
Ye ca taṃ upanayhanti / veraṃ tesāṃ na sammati

“He abused me , he beat me. He defeated me, he robbed me;”  
in those who harbour such thoughts, hatred is not appeased”

4. 「<sup>かれ</sup>彼は<sup>わたし</sup>私を<sup>ののし</sup>罵り、<sup>たた</sup>叩き、<sup>う</sup>打ち<sup>ま</sup>負かし、<sup>わたし</sup>私<sup>の</sup>ものを  
<sup>うば</sup>奪<sup>き</sup>い去ってしまった」と、<sup>うら</sup>そのような<sup>うら</sup>恨みを  
<sup>も</sup>持<sup>た</sup>ない<sup>ひと</sup>人たちに、<sup>うら</sup>怨みは<sup>しず</sup>鎮まる。

Akkocchi maṃ avadhi maṃ / ajini maṃ ahāsi me  
Ye ca taṃ nupanayhanti / veraṃ tesūpasammati

“He abused me , he beat me, He defeated me, he robbed me;” in  
those who do not harbour such thoughts, hatred is appeased”

※年老いてから出家したティッサ（Tissa）長老は、新入りであるにもかかわらず、仏陀の従兄弟であることを鼻にかけ、先輩の比丘たちに敬意を払わないばかりか、サンガに入門した比丘としての務めも怠った。

ほかの比丘たちもティッサ長老の態度を心良く思っていなかったのも、やがてティッサ長老はみんなからいじめられるようになった。立腹した長老は、仏陀のところへ出かけ、このことを訴えた。

仏陀は、ティッサの立場を十分理解した上でみんなにあやまることをアドバイスされた。しかし、ティッサ長老が拒否の態度を示したので、仏陀は「ティッサよ、お前は前世においてもやはり同じ態度をしたのだよ。他の比丘たちに恨みを持つのではない。恨みを持たぬ行動だけが、恨みを静めることができる」と説かれたのである。

（第3・4偈の因縁物語）

5. この世において、<sup>うら</sup>怨みは<sup>うら</sup>怨みによって<sup>けつ</sup>決して<sup>や</sup>止むことはない。<sup>うら</sup>怨みを<sup>す</sup>捨ててこそ<sup>や</sup>止むのである。  
これは、<sup>えいえん</sup>永遠に<sup>か</sup>変わらぬ<sup>しんり</sup>真理である。

Na hi verena verāni / sammantīdha kudācanaṃ  
Averena ca sammanti / esa dhammo sanantano.

Never can hatred be stopped by hatred in this world; only by not holding hatred, by being free from hatred do they cease. This is an eternal law.

※ある農家の息子は、父親の亡くなった後もよく仕事に精を出し、残された母親の面倒もよくみていた。母親は、この孝行息子に早く嫁をもらうことをすすめていたが、息子は嫁をもらう気もなく、のどかで平和な今の生活を楽しんでいた。

ある日、息子の将来を心配する母親が、嫁を探すために心あたりのある家を訪ねようとした時、息子は母親に「どこの家に行きますか？」とたずね、「実は、私には好きな娘がいます」と言った。

やがて母親は、その娘を見つけてきて、二人を結婚させた。しかし、この新妻は子供ができない体であった。

跡継ぎのいない息子の老後を心配する母親は、子供を産める若い娘と再婚することを息子にすすめた。しかし、今の妻で十分だと思っている息子は、再婚話にまったく興味がなかった。ところが、子供のできない妻にとってはショッキングな話であった。

「いつの日か夫は、母親の再婚話に同意するかもしれない。そうなれば、私は母親が選んだ新しい若い娘の下で召し使いのようにこき使われるだろう。その前に、子供ができそうな若い娘を私自身の手で見つけ、夫の新しい妻にしよう」と考えた妻は、早速、村々を駆け巡り、一人の若い娘を見つけ、夫のもとへ連れてきた。結局、この夫は二人の妻を持つことになったのである。

新しい妻は、すぐに子供を身ごもった。子供のできない妻は、それに嫉妬し、妊娠中の新妻の食事にこっそり毒を入れ流産させた。そして、三度目の流産の時、瀕死の重体に

おちいった新妻は、前妻の仕業によって三度も流産させられ子供を殺されたことを知り、復讐を誓って亡くなった。そして、子供のできない妻も、すべてを知った夫の怒りを受け、まもなく病気で亡くなった。

復讐を誓った新妻はネコに生まれ変わり、毒をもった前妻は鶏に生まれ変わった。そして、鶏が卵を産むと、新妻のネコがこっそり近づいて、その卵を食べた。三度も自分の産んだ卵を食べられた前妻の鶏は、このネコに復讐を誓い、死後、ヒョウに、又、前妻のネコは牝鹿に生まれ変わった。牝鹿が子供を産むと、前妻のヒョウがこれを襲い、赤ちゃん鹿を食べた。三度も自分の子鹿を食べられた新妻の牝鹿は、このヒョウに復讐することを誓い、死後、人食い鬼カーリ(Kāli)に生まれ変わり、又、前妻のヒョウは、若妻に生まれ変わった。子を持つ母と、その子を食べおうとする鬼になった二人の妻は、やがて、仏陀にさとされたのである。

(第5偈の因縁物語)

6. <sup>おろ</sup>愚かな<sup>もの</sup>者は、われわれが、この<sup>よ</sup>世で<sup>し</sup>死ぬべき  
<sup>そんざい</sup>存在である、という<sup>じじつ</sup>事実<sup>し</sup>を知らない。

[<sup>かしこ</sup>賢い] <sup>ひとびと</sup>人々は、これをよく<sup>し</sup>知るので<sup>あらし</sup>争い<sup>や</sup>は止む。

Pare ca na vijānanti / mayamettha yamāmase  
Ye ca tattha vijānanti / tato sammanti medhagā

The others (fools) never realize that all of us here must one day die. But those (the wise) who realize it, then their quarrels are appeased.

※コサンビー (Kosambī) という町に二つの比丘たちのグループがあり、一つはサンガ (最高の悟りを得るために修行する比丘たちの集団) の中で「持律師」を中心とするグループであり、もう一つは「説法師」を中心とするグループであった。

この二つのグループは、しばしばお互いの主義主張を繰り返していた。そして、ささいな喧嘩から、やがて、大きな騒ぎとなり、一部の比丘たちは仏陀の忠告さえも聞かなくなった。

そこで仏陀は、静かにこの町を去り、森の中で雨の季節を過ごされた。町の信者たちは、仏陀が町を去ったことを知り、たいへん失望した。そして、町に居残っている比丘たちに対して、以前のように食事をはじめいろいろな施しを一切しなくなったのである。そのために、多くの比丘たちは、たいへんひもじい思いをして雨の季節を過ごした。

やがて、雨季も終わりかけた頃、アーナンダ (Ānanda) 尊者と五百人の比丘は、森におられる仏陀を訪ね、これまでのことを詫び、そして、ぜひ町へ戻っていただきたいというアナータピンディカ (Anāthapiṇḍika) 長者をはじめほかの信者たちの声を伝えた。

町に戻られた仏陀は、比丘たちを穏やかに叱ったのである。

(第 6 偈の因縁物語)



7. この身は清浄であると随観し続け、感覚器官を  
 抑制せず、食べ物において適度を知らず、怠惰  
 であって精進のない人、実にその人を〔煩惱  
 の〕悪魔が征服すること、あたかも風が弱っ  
 た樹を倒すがごとくである。

Subhānupassim viharantaṃ / indriyesu asaṃvutaṃ  
 Bhojanamhi cāmatāññaṃ / kusītaṃ hīnavīriyaṃ  
 Taṃ ve pasahati Māro / vāto rukkhaṃva dubbalaṃ

Whoever lives contemplating pleasant things, with  
 unrestrained senses, immoderate in food, indolent, inactive,  
 Mara surely overthrows him as easily as the gale(overthrows)  
 a weak tree.

8. この身は不浄であると随観し続け、感覚器官を  
 抑制し、食べ物において適度を知り、信仰をも  
 ち、精進のある人、実にその人を〔煩惱の〕  
 マーラ悪魔が征服することはできない。ちょうど  
 強風が岩山を倒すことができないように。

Asubhānupassim viharantaṃ / indriyesu susaṃvutaṃ  
Bhojanamhi cā mattaññaṃ / saddhaṃ āradhāviriyaṃ  
Taṃ ve nappasahati Māro / vāto selaṃva pabbataṃ

Whoever lives contemplating the bodily impurities, with senses restrained, moderate in food, steady in effort and faith, Mara does not overthrow him as the gale (does not overthrow) a rocky mountain.

※①：随観（anupasssī）とは、次から次へと間断なく観ずること。

※②：眼・耳・鼻・舌・身・意の六根という感覚器官。

※ある日、行商の途中で、兄マハーカーラ（Mahākāla）は弟チューラカーラ（Cūlakāla）に荷物の番をさせ、仏陀の説法を聞きに行った。

そして、兄は自分の信仰心から出家したいと弟に告げ、仏陀の下で出家した。弟は、兄を還俗させることを考えて出家した。信仰心の少ない弟のチューラカーラは、瞑想中でも常に世俗的な楽しみを求め、やがて、別れた妻の誘惑に負けてサンガを去った。

深い信仰心をもつ兄の比丘マハーカーラは、墓場での修行に励み、努力して最高の悟りである阿羅漢果を得た。

やがて、別れた妻が、阿羅漢となった比丘マハーカーラを誘惑し還俗させようと試みたが失敗に終わった。

（第7・8偈の因縁物語）

9. 貪欲<sup>どんよく</sup>などの汚れ<sup>けが</sup>から離<sup>はな</sup>れられず、六根<sup>ろっこん</sup>を整<sup>ととの</sup>えず、  
 真実<sup>しんじつ</sup>を語<sup>かた</sup>らずに袈裟衣<sup>けさごろも</sup>を着<sup>き</sup>ている人<sup>ひと</sup>、  
 その人<sup>ひと</sup> 袈裟衣<sup>けさごろも</sup>を着<sup>き</sup>る資格<sup>しかく</sup>なし。

Anikkasāvo kāsāvaṃ / yo vatthaṃ paridahissati  
 Apeto damasaccena / na so kāsāvamarahati.

Whoever, unstainless, without self control and truthfulness,  
 should don the yellow robe, is not worthy of it.

10. [悟<sup>さと</sup>りの力<sup>ちから</sup>で] 汚<sup>よご</sup>れを吐<sup>は</sup>き出<sup>だ</sup>して、よく戒<sup>いまし</sup>めを  
 身<sup>み</sup>につけ、六根<sup>ろっこん</sup>を整<sup>ととの</sup>え、真実<sup>しんじつ</sup>を語<sup>かた</sup>る人<sup>ひと</sup>、  
 その人<sup>ひと</sup>こそ 袈裟衣<sup>けさごろも</sup>を着<sup>き</sup>るに値<sup>あた</sup>する。

Yo ca vantakasāv' assa / sīlesu susamāhito  
 Upeto damasaccena / sa ve kāsāvamarahati.

He who is purged of all stain, is well established in morals and  
 endowed with self control and truthfulness, is indeed worthy  
 of the yellow robe.

※ある日、ひとりの賢い男が、サーリプッタ長老 (Sāriputta)

の説法を聞いた。そして、たいへん感激したこの男はサーリプッタ長老をはじめ多くの比丘たちを招いて、自らも布施をなし、又、人々にも布施を勧めた。

その時、ひとりの財産家が、たいへん高価な布施を持参して「もし、布施のお金が足らなければ、これを売って足してください。その必要がなければ、これを誰かにあげてください」と言った。

結局、布施のお金が足りたので、男は、「この布地を誰に施したらよいでしょうか？」と皆にたずねると、「サーリプッタ長老に」という声よりも、「デーヴァダッタに」という声が多かった。そして、その布地はデーヴァダッタ (Devadatta) の手に渡ったのである。

デーヴァダッタは、この布地で豪華な袈裟衣を作り、それを着て比丘の姿となって「俺は偉いんだ！俺をもっと尊敬しろ！もっと施しをしろ！」と言わんばかりの傲慢な態度で、人々を威圧しながら町の中をねり歩いた。この姿を見た比丘が町から帰り、仏陀に報告した。

仏陀は、デーヴァダッタは前世でも同じことをしたと彼の前世について述べられた。デーヴァダッタの前世は、象を狩るハンターであった。

ある日、ハンターは、森の象が黄色い衣を着た辟支仏 (Pacceka Buddha) (註①) に出会うと、敬意を払うためひざまづく習性があることを知った。そこでハンターは、黄色い衣を着て辟支仏に変装して象の群れに近づき、ひざをまげ、敬意をあらわしている象のスキを狙って殺したのである。

そして、ハンターは、この方法で多くの象を殺し続けたのである。

仏陀は、「法衣は戒律を守り、篤信高德な仏陀の弟子の象徴となる人が身に着けるものである」と説かれたのである。

(第 9・10 偈の因縁物語)

※註①「辟支仏 (Pacceka Buddha)」：一人で悟りを開いた人。しかし、自ら悟りを開いても、自分が悟った道を世間に悟らせることができない。正自覚者とその教えがない時に現われる。しかし、正自覚者とその教えが現われると辟支仏は現われない。

11. 眞実<sup>まこと</sup>でないものを眞実<sup>まこと</sup>と<sup>おも</sup>い、眞実<sup>まこと</sup>であるものを眞実<sup>まこと</sup>でない<sup>み</sup>と<sup>ひと</sup>見る人は、誤<sup>あやま</sup>った<sup>かんが</sup>考<sup>けん</sup>えや<sup>かい</sup>見<sup>けん</sup>解<sup>かい</sup>を<sup>も</sup>持<sup>も</sup>っているから、決<sup>けつ</sup>して眞実<sup>まこと</sup>を<sup>え</sup>得<sup>え</sup>られない。

Asāre sāramatino / sāre cāsāradassino  
Te sāraṃ nādhigacchanti / micchāsaṅkappagocarā.

In the unessential they imagine the essential, in the essential they see the unessential, they who entertain (such) wrong thoughts never realize the essence.

12. 眞実<sup>まこと</sup>を眞実<sup>まこと</sup>と<sup>し</sup>知<sup>し</sup>り、眞実<sup>まこと</sup>でないもの眞実<sup>まこと</sup>でない<sup>し</sup>と<sup>ひと</sup>知<sup>し</sup>る人は、正<sup>ただ</sup>しい<sup>かんが</sup>考<sup>かんが</sup>えを<sup>も</sup>持<sup>も</sup>っているから、眞実<sup>まこと</sup>を<sup>え</sup>得<sup>え</sup>られる。

Sārañca sārato ñatvā / asārañca asārato  
Te sārāṃ adhigacchanti / sammāsaṅkappagocarā.

What is essential they regard as essential, what is unessential they regard as unessential, they who entertain (such) right thoughts realize the essence.

※昔、ウパティッサ青年 (Upatissa: 後のサーリプッタ長老) とコーリタ青年 (Kolita: 後のマハーモッガラーナ長老) は、サンジャヤ先生 (Sañjaya) のところで修行していたが、師匠の教えに満足できないでいた。

ある日、朝食を済ましたウパティッサ青年は、偶然、仏陀の弟子であるアッサジ (Assaji) と出会い、「ぜひ、仏陀の教えをお聞かせください」とお願いした。比丘アッサジから仏陀の教えの一部を聞いたウパティッサ青年は、その教えの素晴らしさに感嘆すると同時に、たちまちその場で悟りを得ることができた。この喜びを親友に知らせようとウパティッサは、急いでコーリタのところへ走っていき、仏陀の教えを伝えた。そして、この青年もその場で悟りを得ることができた。

二人の青年は、師匠のサンジャヤ先生のところへ行き、仏陀のもとで修行をやりなおしましょうと誘った。しかし、サンジャヤ先生は、これを断った。

「私は、今まで多くの弟子たちの師匠であった。もし、私が仏陀のところへ行けば、ちょうど大きな水瓶から小さな水桶に変わるように、私は仏陀の弟子にならなければならない。それでは、私のプライドが許さない」。

この話を聞いた仏陀は、「サンジャヤの誤った考えが彼を正しい真理を知ることから遠ざけている。サンジャヤは、真理でないものを真理であるとみているから、決して正し

い真理を知ることができない」と説かれたのである。  
(第 11・12 偈の因縁物語)

13. <sup>そまつ</sup>粗末な<sup>やね</sup>屋根ふきをした<sup>いえ</sup>家に<sup>あめ</sup>雨が<sup>も</sup>漏れるように、  
<sup>しゅうよう</sup>修養のない<sup>こころ</sup>心に、<sup>むさぼり</sup>貪欲が<sup>しんにゆう</sup>侵入する。

Yathā agāraṃ ducchannaṃ / vuṭṭhī samativijjhati  
Evaṃ abhāvitaṃ cittaṃ / rāgo samativijjhati.

Even as rain penetrates an ill--thatched house, so does lust  
penetrate an undeveloped mind.

14. <sup>ていねい</sup>丁寧によく<sup>やね</sup>屋根ふきをした<sup>いえ</sup>家に<sup>あめ</sup>雨が<sup>も</sup>漏らないよ  
うに、<sup>しゅうよう</sup>修養された<sup>こころ</sup>心に、<sup>むさぼり</sup>貪欲が<sup>しんにゆう</sup>侵入しない。

Yathā agāraṃ succhannaṃ / vuṭṭhī na samativijjhati  
Evaṃ subhāvitaṃ cittaṃ / rāgo na samativijjhati

Even as rain does not penetrate a well--thatched house, so  
does lust not penetrate a well -- developed mind.

※仏陀が悟りを開かれ、最初に説法された後、マガタ国王  
舎城（Rājagaha）外にある竹林精舎（Veḷuvana）におられた  
頃である。

仏陀の父上スッドーダナ王（Suddhodana）は、「故郷のカピ  
ラヴァットゥ（Kapilavatthu）に、ぜひ一度訪ねて欲しい」と  
いう使者を幾度となく仏陀のもとへ送った。

しかし、その多くの使者たちは、仏陀の教えに魅せられて、  
次々と出家して比丘となり、熱心に修行した結果、悟りの  
第四段階である阿羅漢（Arahant）を得た。その時、使者の一  
人であったカーラウダーニ（Kāla Udāyi）長老は、自分の役  
目を思い出した。

そして、仏陀は、カーラウダーニ長老の案内でほかの比丘  
たちと一っしょにカピラヴァットゥを訪ねられた。

故郷に帰られた仏陀は、第一日目に、シャカ族の人々に説  
法された。二日目に、施しを受けるため王宮に行かれ、そ  
こでも説法され、父上スッドーダナ王は、悟りの第二段階  
である一來果（Sakadāgāmi-phala）を、義母マハーパジャー  
パティー（Mahāpajāpatī）は、その第一段階である預流果  
（Sotāpatti-phala）を得た。

三日目に、仏陀の従兄弟にあたるナンダ王子（Nanda）の結  
婚式が行われた。仏陀は、施しを受けるためにその宮殿に  
やって来ると、新郎のナンダ王子の両手にたく鉢の「鉢」  
を置き、お祝いを述べられた。そして、席から立ち上がると、  
ナンダ王子から「鉢」を受け取ることなく、出かけられ  
た。

ナンダ王子は、「鉢」にたくさんの施しを入れた後、どこで  
仏陀に手渡そうかと迷っている間に、その機会を失い、「鉢」  
をもったまま仏陀の後に従って宮殿を出た。

そして、仏陀から出家を勧められた。その時、ナンダ王子  
は「私は比丘になりたくない」と答えるつもりが、思わず  
「はい。私は比丘になりたいです」と逆のことを口走って



しまい、髪を切って出家した。又、しばらくして、実の息子であるラーフラ王子(Rāhula)も出家した。

父上スッドーダナ王は、仏陀によって二人の王子が出家したことに不満を持ち、以後、保護者の許可を得てから出家させるように仏陀に申し入れた。仏陀は、この申し入れを聞き届けた。

比丘となったナンダは、仲間の比丘たちと森の中で瞑想の修行をした。しかし、花嫁ジャナパダカヤーニー(Janapadakalyāṇī)の、あの美しい姿が、走馬灯のように浮かんでは消え、彼を悩ました。

仏陀は、この比丘ナンダの悩みを理解し「もっと修行すれば、三十三天界(Tāvātimsa)にいる美しい女神たちを得ることができる。私がおの保証人となろう」とアドバイスされた。これを励みに、再び比丘ナンダは修行を始めた。

しかし、ほかの比丘たちから美しい女神を求めるために修行をしているという非難を受けた。これはたいへん恥ずかしいことだと反省した比丘ナンダは、心を入れ替え、猛烈な修行に挑み、やがて阿羅漢の悟りを得た。

そして、仏陀のところへ行き、美しい女神を得るための保証人を解約していただきたいと願い出た。仏陀は、比丘ナンダの心境の変化を見て、悟りをひらく前の比丘ナンダの心の状態を雨漏りする家に、悟りをひらいた後の心の状態を雨漏りのしない家に例えて説かれた。

そして、仏陀は、花嫁の慕情を捨てさせるために三十三天界の美しい女神たちをもって比丘ナンダを誘われたことは、これは最初でなく、彼の前世でもすでに同じ事があったと述べられた。

昔、ベナレスの町をブラフマダッタ(Brahmadatta)が支配していた頃、カッパタ(Kappata)という商人がいた。カッパタは、毎日一頭のロバを使って陶器の荷を運んでいた。

ある日、カッパタは、タッカシラーという町にやって来て、

商談をしている間、ロバを自由にしてやった。そしてロバが水路の土手のまわりで遊んでいると、一頭の雌ロバがあらわれ、二頭は仲良しになった。商談を終えたカップタは、ロバを連れて家に帰ろうとしたが、雌ロバとの恋愛に夢中になっているロバは、頑固にその場を離れようとはしなかった。

そこでカップタは、優しい声で「家に帰ったら、もっと美しい雌ロバと夫婦にしてやるよ」とロバの耳元でささやいた。

家に戻って来てから数日後、美しい花嫁を待ち続けているロバは、ついに痺れを切らして「あなたは美しい雌ロバと夫婦にしてやると私に言いましたが」とカップタにたずねた。

そこでカップタは、「確かに言った。お前の望みどおり、その相手を連れてくる。しかし、お前には一人分の食べ物しか与えない。それだけの食べ物で、どうして妻や子を養うことができるのだ」と答えた。

「・・・・・・・・」ロバは、結婚を諦めた。

このカップタ商人が、今の私であり、ロバは比丘ナンダであり、そして、雌ロバは花嫁ジャナパダカヤーニーであると語られたのである。

(第 13・14 偈の因縁物語)

15. <sup>わる</sup>悪いことをする人は、この世<sup>ひと</sup>で悲<sup>よ</sup>しみ、あの世<sup>かな</sup>に  
悲<sup>かな</sup>しみ、二つ<sup>ふた</sup>の世<sup>よ</sup>において悲<sup>かな</sup>しむ。  
自分<sup>じぶん</sup>の汚<sup>けが</sup>れた行<sup>ふる</sup>為<sup>まい</sup>を見て、その人<sup>ひと</sup>は、悲<sup>かな</sup>しみ、  
かつ<sup>くる</sup>苦しむ。

Idha socati pecca socati / pāpakārī ubhayattha socati  
So socati so vihaññati / disvā kammakiliṭṭhamattano.

Here he grieves, hereafter he grieves. In both states the evil – doer grieves. He grieves, he is afflicted , perceiving the impurity of his own deeds.

※チュンダ (Cunda) は、長い間豚を殺し続けていた。まず、生きている豚を柱に縛り、こん棒でなぐり殺し、その豚の口に沸騰したお湯を注ぎ込んで内臓をきれいに洗い、最後に、首を鋭い刃物で切り落とすのである。  
この屠殺を五十五年以上も続けて来たチュンダは、たいへん残念なことに一度も皆から愛され、喜ばれるということをしなかった。いつの日かチュンダは病気となり、ちょうど殺される豚が死に際に、ヒヒィー、ヒヒィーと悲鳴をあげるように、七日間激しい苦痛を味わいながら死んだ。  
そして、死後、彼は地獄の苦しみを受ける世界 (Avīci Niraya) に生まれ変わったのである。

(第 15 偈の因縁物語)

16. 善いことをする人は、この世で喜び、あの世で  
喜び、二つの世において喜ぶ。  
自分の清らかな行為を見て、その人は、喜び、  
かつ楽しむ。

Idha modati pecca modati / katapuñño ubhayattha modati  
So modati so pamodati / disvā kammavisuddhamattano.

Here he rejoices, hereafter he rejoices. In both states the well-doer rejoices. He rejoices, exceedingly rejoices, perceiving the purity of his own deeds.

※つつましく信心深いダンミカ (Dhammika) は、良き夫であり、七人の息子たちや七人の娘たちにとっても良き父親であった。又、ダンミカは、五百人の信者のリーダーとして、みんなから尊敬を受け、比丘たちにいろいろな施しをしていた。

ある日、ダンミカは重い病気にかかり死の床についた。そして、比丘たちにお経を唱えていただきたいと、仏陀のもとに「使い」をおくった。

比丘たちがダンミカの枕元で念住経 (Satipaṭṭhānasutta) を唱えはじめると、神々の世界から美しく飾られた馬車がダンミカの目の前に現れ、彼を天国に連れて行ったのである。

(第 16 偈の因縁物語)

17. 悪いことをした人は、この世で苦しむ、あの世で苦しむ、二つの世において苦しむ。

「自分は、悪いことをした」と苦しむ、悪趣の淵に落ち込み、ますます苦しむ。

Idha tappati pecca tappati / pāpakārī ubhayattha tappati  
Pāpaṃ me katanti tappati / bhiiyo tappati duggatim gato

Here he suffers, hereafter he suffers. In both states the evil – doer suffers. “Evil have I done ” (thinking thus), He suffers. Then later, he suffers, having gone to a woeful state.

※ある日、仏陀がアヌーピヤ（Anūpiya）の近くにいた頃、同じシャカ族の縁者から六人の王子が出家した。その中にデーヴァダッタ王子も参加していた。やがてデーヴァダッタは、仏陀が多くの人々から尊敬され、たくさんの施しを受けていることを妬むようになり、いつの日か仏陀に代わって比丘たちの指導者になる夢を見るようになった。ある日、仏陀がラージャガハ（Rājagaha）のヴェールヴァナ僧院（Veḷuvana）で説法していた時、デーヴァダッタは仏陀に近づき「すでにお年を召されている仏陀に代わり、このデーヴァダッタがサンガの運営をいたしましょう。どうぞ、私にお任せ下さい」と言った。しかし、仏陀は、この申し入れを断った。これを根に持ったデーヴァダッタは、復讐を誓い、三度、仏陀を殺すことを試みた。

一度目はプロの殺し屋を雇い、二度目は大きな岩を落とし、そして、三度目は象を使ったが、ことごとく失敗に終わった。次にデーヴァダッタは、サンガを分裂させる陰謀を計ったが、これもサーリプッタ長老とマハーモッガラーナ長老に阻止され、失敗に終わった。そして、デーヴァダッタは、サンガを去った。

月日が流れ、デーヴァダッタは病に倒れ九ヶ月間ほど床に臥せていた。自分の死期が近いと感じたデーヴァダッタは、一度仏陀に会い、過去の過ちを謝罪したいと、周囲の反対を押し切って旅に出た。

その途中、師匠のデーヴァダッタといっしょにやって来た弟子たちは、ジェタヴァナという所で、師匠を乗せた「籠」を池の土手の上において、旅で汚れた身体を洗うために池の中に入った。デーヴァダッタは「籠」から降りて大地の感触を両足で確かめ、旅の疲れをいやそうとした、その時、彼の足が大地に沈みはじめたのである。最初は、足首から、そして、膝、腰、胸、首と、少しずつ、大地に引き込まれたのである。

デーヴァダッタは、過去の悪行によって、仏陀に会うことなく、死後、地獄の苦しみを受ける世界（Avicī Niraya）に生まれ変わったのである。

（第 17 偈の因縁物語）

18. 善いことをした人は、この世でよろこび、あの世でよろこび、二つの世でよろこぶ。  
「私は、善いことをした」とよろこび、善趣に恵まれると、ますますよろこぶ。

Idha nandati pecca nandati / katapuñño ubhayattha nandati  
Puññaṃ me katanti nandati / bhiyyo nandati suggaṭiṃ gato.

Here he is happy, hereafter he is happy. In both states the well-doer is happy. “Good have I done” (thinking thus), he is happy. Then later, is he happy, having gone to a blissful state.

※仏陀の有力な支持者であるアナータピンディカの家には、毎日たくさんの比丘たちが訪れ、長女のマハー・スバッター (Mahā Subhaddā)、次女のチュッラーズバッター (Cullā Subhaddā)、そして三女のスマナー (Sumanā) も手伝っていろいろな施しをしていた。そして、比丘たちが説く仏陀の教えを聞きながら、長女と次女は悟りの第一段階である預流果 (Sotāpattiphala) を、三女は第二段階である一來果 (Sakadāgāmiṃphala) を得た。

いつの日か三女のスマナーが、病気となり死の床についた。心配した父親がなぐさめると、重病の娘が「どうかしたのかい」と年上のような口をきいた。びっくりした父親は「娘よ、話し方がおかしいよ」と話しかけた。「そんなことはない」「娘よ、死を前にして怖いのかい？」

「だいじょうぶよ」と言うと、心穏やかに息を引きとった。

しかし、父親は、特に信仰深い三女の死とその支離滅裂な会話に大きなショックを受けた。そして、父親は涙を流しながら仏陀に相談した。

仏陀は父親の話聞いた後、「信心深い貴方の末娘スマナーは、すでに悟りの第二段階に進んでいた。父親である貴方は、第一段階を得ているにすぎない」と説かれたのである。

(第 18 偈の因縁物語)

19. たとへ <sup>せいてん</sup> 聖典を <sup>おお</sup> 多く <sup>おし</sup> 教え、<sup>と</sup> 説いても、これを

<sup>じっこう</sup> 実行せず、<sup>なおざり</sup> 放逸にしている <sup>ひと</sup> 人は、まこと むな

しく <sup>か</sup> 飼 <sup>ぬし</sup> い主の <sup>うし</sup> 牛をかぞえている <sup>うしお</sup> 牛追いのように、

<sup>しゃもん</sup> 沙門である <sup>あじ</sup> 味わい (<sup>げだつ</sup> 解脱) を <sup>あじ</sup> 味わうことはない。

Bahumpi ce saṃhita bhāsamāno /

na takkaro hoti naro pamatto

Gopova gāvo gaṇayaṃ paresaṃ / na bhāgavā sāmññassa hoti.

Through much he recites the Sacred Texts(Tipiṭaka). But acts not accordingly, that heedless man is like a cowherd who counts others' -cattle. The bliss of monkhood he does not reap.



20. たとへ わずかな<sup>せいてん</sup>聖典<sup>おし</sup>しか<sup>と</sup>教え、説<sup>と</sup>かなくても、  
身<sup>み</sup>に行<sup>おこな</sup>うことが<sup>ダンマ</sup>法<sup>したが</sup>に従<sup>い</sup>い、貪<sup>どんよく</sup>欲<sup>いか</sup>と怒<sup>む</sup>りと無<sup>ち</sup>知<sup>ち</sup>を  
捨<sup>す</sup>て、正<sup>ただ</sup>しく知<sup>し</sup>り、煩<sup>ぼんのう</sup>悩<sup>う</sup>から心<sup>こころ</sup>がよ<sup>げだつ</sup>く解<sup>げ</sup>脱<sup>だつ</sup>し、  
この世<sup>よ</sup>にも あ<sup>よ</sup>の世<sup>よ</sup>にも 執<sup>しゅう</sup>着<sup>ちやく</sup>しない、その人<sup>ひと</sup>こ  
そ、沙<sup>しゃ</sup>門<sup>もん</sup>にな<sup>あ</sup>った味<sup>あじ</sup>わい<sup>げだつ</sup>（解<sup>あじ</sup>脱<sup>だつ</sup>）を味<sup>あじ</sup>わう。

Appampi ce saṃhita bhāsamāno /  
dhammassa hoti anudhammacāri  
Rāganca dosaṅca pahāya moham /  
sammappajāno suvimuttacitto  
Anupādiyāno idha vā huram vā / sa bhāgavā sāmañṅassa hoti.

Through little he recites the Sacred Texts(Tipiṭaka), but acts in accordance with the teaching, forsaking lust, hatred and ignorance, truly knowing, with mind well freed, clinging to nothing here and hereafter, he does attain the bliss of monkhood.

※貴族の中から二人の友達が出家して比丘となった。  
一人は正しい真理の教えにも精通した博学の比丘で、五百人の比丘たちを教え、十八の比丘グループの指導者でもあった。しかし、自分の知っていることを実践していなかった。もう一人は、博学ではなかったが、自分の知っているわずかな教えを熱心<sup>じゆんしん</sup>に実践していた。そして、悟りへの第四段階である阿羅漢果(Arahat)を得た。  
悟りを得た比丘は、仏陀を表敬訪問する途中、博学の比丘と出会った。博学の比丘は、自分で質問してこの比丘に恥をかかしてやろうと考えた。

しかし、仏陀は、博学の比丘がそのようなことをして地獄に落ちるのを哀れみ、仏陀自ら禅定や悟りの内容について二人の比丘に質問した。

阿羅漢の悟りを得た比丘は、自分の体験をもとにすべての質問に答えた。

博学の比丘は、それに答えることができなかった。

仏陀は、わずかな教えしか知らずとも、それを実践し、悟りをひらいたこの比丘を賞賛したのである。

(第 19・20 偈の因縁物語)





## 第二 不放逸の章 APPAMĀDA VAGGA (HEEDFULNESS)

21. <sup>はげみ</sup>不放逸こそ、<sup>ふし</sup>不死の<sup>みち</sup>道なり。<sup>おこたり</sup>放逸こそ、<sup>し</sup>死の<sup>みち</sup>道なり。<sup>はげみ</sup>不放逸の<sup>ひと</sup>人は、<sup>し</sup>死ぬことはない。  
<sup>おこたり</sup>放逸の<sup>ひと</sup>人は、<sup>い</sup>生きているのに、<sup>し</sup>すでに死んでい  
るようなものであると<sup>い</sup>言われる。

Appamādo amatapadam / pamādo maccuno padam  
Appamattā na mīyanti / ye pamattā yathā matā

Heedfulness is the path to deathless. Heedlessness is the path to death. Those who are heedful do not die; those who are not heedful are as if already dead.

22. このように その<sup>そうい</sup>相<sup>し</sup>異を知って<sup>はげみ</sup>不放逸に<sup>とうたつ</sup>到達し  
<sup>ひと</sup>た人は、<sup>しょうじん</sup>精進の<sup>なか</sup>中による<sup>かん</sup>こびを感じ、<sup>せいじゃ</sup>聖者の  
<sup>きょうち</sup>境地である <sup>どう①</sup>道・<sup>か②</sup>果・<sup>ねはん③</sup>涅槃を<sup>こころ</sup>心から<sup>たの</sup>楽しむ。

Evam visesato ñatvā / appamādamhi paṇḍitā  
Appamāde pamodanti / ariyānaṃ gocare ratā.

Knowing this as the difference, the wise (intent) on heedfulness rejoice in heedfulness, delighting in the realm of the sacred.

23. その賢者<sup>けんじゃ</sup>たちは、[止観<sup>しかん</sup>④]の瞑想<sup>めいそう</sup>に励<sup>はげ</sup>み、  
煩悩<sup>ぼんのう</sup>を燃<sup>も</sup>やし尽<sup>つ</sup>くし、たえず努力<sup>どりよく</sup>奮励<sup>ふんれい</sup>して  
四<sup>よつ</sup>つの束縛<sup>そくばく</sup>⑤を遮断<sup>しゃだん</sup>し無上<sup>むじょう</sup>の涅槃<sup>ニバーナ</sup>に到達<sup>とうたつ</sup>する。

Te jhāyino sātatikā / niccam daḥhaparakkamā  
Phusanti dhīrā nibbānam / yogakkhemam anuttaram.

The wise constantly meditative, the ever steadfast ones realize the bond –free, supreme Nibbana.

※昔、仏陀に結婚を申し込み、断られたことのある美しい女性の娘マーガンディヤー (Māgandiyā) は、それを逆恨みして、いつか仏陀に復讐することを誓っていた。やがて、王に認められ王妃になった彼女は、仏陀に帰依し、悟りへの第一段階である預流果 (Sotāpanna) を得ている同じ王妃のサーマーヴァティー (Sāmāvatī) に強いライバル意識を持った。マーガンディヤーは、この王妃を陥れるためにいろいろな奸計をめぐらしたが、ことごとく失敗に終わった。業を煮やしたマーガンディヤーは、ついに強硬手段にでてサーマーヴァティー王妃を火あぶりにしたのである。この悲惨な事件を知った王は、もっと残忍な方法でマーガンディヤ王妃を処刑した。

比丘たちは、二人の王妃のうちどちらが本当の人生を生きたのか仏陀にたずねた。

仏陀は、放逸なる者は百年生きても死んだ者であり、不放逸なる者は、たとえ死んでも生きている。故に、マーガンディヤーは、たとえ長生きしても死んだ者であり、逆に、サーマーヴァティー王妃は、死んでも生きていると説かれたのである。

(第 21・22・23 偈の因縁物語)

※①「道」とは、煩惱に打ち勝ち、それを捨断して涅槃を実現する心。悟りの四段階にある各段階の「壁」を打ち破ったその一瞬の心。預流向・一來向・不還向・阿羅漢向。

※②「果」とは、「道」の後で、繰り返し涅槃の静けさを味わう心。預流果・一來果・不還果・阿羅漢果。

※「預流（よる）」（Sotāpanna）とは、悟りの第一段階のことであり、聖者の仲間入りをした初歩の聖者をいう。この聖者は、欲界に多くとも七度生まれ、その後は、最高位の阿羅漢まで到達する。

邪見（有身見：この心と体は自分のものと思うこと）、習慣的儀礼的行為への執着、疑い（仏・法・僧の三宝及び業・因果・修行法に対する疑い）などを断つ。

※「一來（いちらい）」（Sakadāgāmi）とは、悟りの第二段階のことであり、一度だけ欲界に戻り来て、その後は、上二界（色界・無色界）を経て阿羅漢の悟りに到達する。怒り・愛欲の貪り・色界への貪り・無色界への貪り・心の浮つき・無明などの残りの煩惱を薄める。

※「不還（ふげん）」（Anāgāmi）とは、悟りの第三段階のことであり、愛欲と怒りを完全に捨断しているのもは

や欲界に生まれ変わることはない。しかし、色界と無色界への欲望だけがまだ残っているために上二界に生まれ変わる。

※「阿羅漢（あらかん）」（Arahant）とは、悟りの第四段階のことであり、残りの煩惱（色界への貪り、無色界への貪り、高慢、心の浮つき、無明）を捨断した漏尽者であり、輪廻から解脱した、供養尊敬を受けるべき聖者の中で最上の聖者である。

※③「涅槃」（Nibbāna）とは、煩惱の火が吹き消された（生・老・病・死のない）完全な幸福をいう。

※④「止」とは、何かの概念的対象に心を集中させること。「観」とは、心身現象の無常（Anicca）・苦（Dukkha）・無我（Anatta）を直観すること。「止」が「観」を助け、「観」なしでは解脱はあり得ない。

Aniccā vata saṃkhārā（諸行は、実に無常である）  
Sabbe Saṃkhārā aniccā（一切法は、無常なり）  
Dukkha vata saṃkhārā（諸行は、実に苦しみである）  
Sabbe saṃkhārā dukkhā（一切行は、苦なり）  
Anatta vata saṃkhārā（諸行は、実に無我である）  
Sabbe dhammā anattā（一切行は、無我なり）

※この①②③④は「南方仏教基本聖典」（ウ・ウェーブ  
ラ著）「南方上座部仏教の教え」（ウージョターランカー  
ラ著）にくわしく記載されている。

※⑤：束縛（Yoga）とは、人々を輪廻に沈め、結びつけておくもの。



- (1) 欲愛(Kama)、(2) 生存(Bhava)、(3) 邪見(Diṭṭhi)、  
(4) 無明 (Avijjā) という束縛がある。

24. こころ奮<sup>ふる</sup>い立ち、よく気<sup>き</sup>をつけて 行<sup>おこな</sup>い清<sup>きよ</sup>く、  
よく考<sup>かんが</sup>えて行<sup>こうどう</sup>動し、自<sup>じぶん</sup>分をよ<sup>おさ</sup>く制<sup>ただ</sup>え、正<sup>ただ</sup>しい  
生<sup>せいかつ</sup>活をする人<sup>ひと</sup>の誉<sup>ほま</sup>れ、いよいよあがる。

Uṭṭhānavato satīmato / sucikammaṣa nisammakārino  
Saññatassa dhammajivino/  
appamattassa yaso bhivaḍḍhati

The glory steadily increases of him who is energetic,  
mindful, pure in deed, considerate, self – controlled, right –  
living, and heedful

※恐ろしい伝染病が町を襲い、多くの人々が亡くなった。  
。「金貸し」を営む夫婦もこの伝染病にかかり、息子のク  
ンバゴサカ (Kumbhaghosaka) に早く町を離れるように言  
い残してこの世を去った。  
十二年の歳月が流れ、青年となったクンバゴサカが町に戻  
って来た。しかし、だれもこの青年を「金貸し」の息子と  
は思わなかった。皆が信じられないほど、青年の姿がみす  
ぼらしかったのである。  
しかたなしに青年は、両親が隠した巨額な財産を捜しはじめた。  
幸いにも財産は昔のままであったが、この膨大な財

産を目の前にクンバゴサカは、じっくり考えた。「もし、この財産を町の人々に見せても、貧しい乞食が偶然宝物を発見したと誤解され、王様に没収されるだけである。今は、時期ではない」と判断した青年は、「それよりも、今日の食事代を稼ぐことが先決だ」と言って、早速仕事を探しに出かけた。

クンバゴサカ青年の新しい仕事は、町の「目覚まし呼び回り」という仕事であり、朝の起床や食事・仕事などの時間になると、大きな声で「時間ですよ！時間ですよ！」と叫びながら町中を駆け回るのである。

ある早朝、王がこの声を聞き、早速その声の主を調べさせた。

宮廷に連れて来られたクンバゴサカ青年は、王に自分のことについて話した。話を聞き終えた王は、この青年の賢さにたいへん感心し、元の「金貸し」商いの再開を許すと同時に、自分の娘をあたえ、二人を結婚させた。

後に、王はこの男を高官に昇進させ、仏陀に紹介した。

(第 24 偈の因縁物語)

25. 奮<sup>ふん</sup>励<sup>れい</sup>努力<sup>どりよく</sup>し、（戒<sup>いまし</sup>めによって）自分<sup>じぶん</sup>を制<sup>おさ</sup>え、  
 六<sup>ろっ</sup>根<sup>こん</sup>を守<sup>まも</sup>り、智<sup>ち</sup>慧<sup>え</sup>ある人<sup>ひと</sup>は、輪<sup>りん</sup>廻<sup>ね</sup>の海<sup>うみ</sup>に  
 阿<sup>あ</sup>羅<sup>らかん</sup>漢<sup>か</sup>果<sup>か</sup>の〔島<sup>しま</sup>〕（完<sup>かん</sup>全<sup>ぜん</sup>な解<sup>げ</sup>脱<sup>だつ</sup>）を<sup>つく</sup>作るべきである。  
 [その島<sup>しま</sup>を] 煩<sup>ぼん</sup>悩<sup>のう</sup>の激<sup>げ</sup>流<sup>きりゅう</sup>が押<sup>お</sup>し寄<sup>よ</sup>せても、  
 流<sup>なが</sup>し去<sup>き</sup>ることはできない。

Uṭṭhānena‘ ppamādena / saṃyamena damena ca  
 Dīpaṃ kayīrātha medhāvi / yaṃ ogho nābhikīrati.

By sustained, effort, earnestness, discipline, and self – control let the wise man make for himself an island, which no flood overwhelms.

- ※弟の比丘チューラパンタカ（Cūḷapanthaka）は、もの覚えが悪く、わずか四行の詩を四ヶ月かかっても暗記できなかった。兄の比丘マハーパンタカ（Mahāpanthaka）は、弟に「サンガを出て行け」と追い出した。翌朝、サンガを去ろうとする弟比丘の目の前に仏陀が現れ「こんなに朝早くどこへ行くのかね？」とたずねられた。弟の気持ちを察している仏陀は、純白の布地を手渡し「『汚れを持つ布地よ、汚れを持つ布地よ』と言いながら、擦り続けなさい」と命じた。弟比丘は仏陀の言われたとおり「汚れを持つ布地よ、汚れを持つ布地よ」と言いながら一生懸命擦り続けた。しばらくすると、美しい純白の布地が、自分の汗で汚れているのに気づいた比丘チューラパンタカは、この世の無常

を知り、サンガに残って修行を続け、やがて悟りをひらいたのである。

(第 25 偈の因縁物語)

26. 智慧ちえのない愚おろかな人ひとたちは、放逸なほざりに耽ふけり、  
智慧ちえのある賢かしこい人ひとは、不放逸はげみを最上さいじょうの財産ざいさんのよう  
に守まもる。

Pamādamanuyuñjanti / bālā dummedhino janā  
Appamādañca medhāvī / dhanam setṭhamva rakkhati.

The ignorant, foolish folk indulge in heedlessness; the wise man guards earnestness as the greatest treasure.

27. 放逸おこたりに耽ふけるな！ 欲望よくぼうの楽たのしみに親したしむな！  
何故なぜならば、不放逸はげみにして止し・観かんの瞑想めいそうによって、  
煩悩ぼんのうを焼却しょうきやくした人ひとは、涅槃ニバーナという大おおいなる  
安やすらぎと楽たのしみを得えるからである。

Mā pamādamanuyuñjetha / mā kāmaratisanthavaṃ  
Appamatto hi jhāyanto / pappoti vipulaṃ sukhaṃ.

Do not indulge in heedlessness; have no intimacy with sensuous delight. Truly, the earnest, meditative person obtains abundant bliss.

※ある町で、七日間のバーラナッカッタ（Bālanakkhatta）祭りがおこなわれた。祭りに興奮した一部の若者たちが自分の体に灰や牛の糞を塗りつけ、叫び声を上げながら馬鹿騒ぎをした。又、ある若者たちは、他人の家の前に立ち、お金をせびるのであった。仏陀を町に招待した人々は、この若者たちの無軌道な騒ぎに呆れ果て、仏陀に「どうぞこの祭りが終わるまで、郊外の僧院でしばらくお待ちください」とお願いした。そして、祭りが終わった八日目の日、仏陀と比丘たちは町にはいり、いろいろな施しを受けた。その席上、仏陀は次のように説法されたのである。

（第 26・27 偈の因縁物語）

28. 賢者は、不放逸によって放逸を切り捨てる時、  
 智慧の高楼に登り 憂いに沈んだ人々を憂いなく  
 見下ろす。ちょうど山頂に立つ人が地上の人々を見  
 るように、賢者は愚かな人を見おろすのである。

Pamādaṃ appamādena / yadā nudati paṇḍito  
 Paññāpāsādamāruhya / asoko sokiniṃ pajam  
 Pabbataṭṭhova bhūmaṭṭhe / dhīro bāle avekkhati.

When in understanding one discards heedlessness by  
 heedfulness, he, free from sorrow, ascends to the palace of  
 wisdom and surveys the sorrowing folk. As a man on a top  
 of mountain the wise surveys the groundlings.

※マハーカッサパ長老が、ピッパリ (Pipphali) 洞窟で  
 修業しておられた頃である。朝食を終えた長老は、光明遍  
 (āloka kaṣiṇa)をひろげ、そして、放逸な人、不放逸な人、  
 又、水や大地や山頂において死んだ人、生まれた人を、天  
 眼をもって見つけながら座っていた。  
 その時仏陀は、ジェータワナ (Jetavana) より「我が弟子カ  
 ッサパよ、お前は何をしているのか？」とその神通力でた  
 ずねた。そして、天眼で、マハーカッサパ長老が、死んだ  
 人、生まれた人を見つけているのを知ったのである。そこ  
 で、仏陀は「それは、仏陀の智慧によっても区別がつかぬ  
 ことである。母親の胎内で、親が知らぬ間に死んだ者

は、数え切れない。それを知るのは、お前の責任ではない。それは私の責任である」と言って次の詩偈を説かれたのである。

(第 28 偈の因縁物語)

29. <sup>あし</sup>足の<sup>はや</sup>早い<sup>うま</sup>馬<sup>が</sup>が(足の)<sup>あし</sup>遅<sup>おそ</sup>い<sup>うま</sup>馬<sup>を</sup>を<sup>あと</sup>後<sup>はし</sup>に<sup>さ</sup>走<sup>り</sup>去<sup>る</sup>る  
よ<sup>う</sup>に、<sup>な</sup>放<sup>お</sup>逸<sup>ぎ</sup>の<sup>ひ</sup>人<sup>と</sup>々<sup>と</sup>の<sup>な</sup>中<sup>か</sup>に<sup>ひ</sup>一<sup>と</sup>り<sup>よ</sup>く<sup>し</sup>精<sup>し</sup>進<sup>じん</sup>し、  
う<sup>ね</sup>ち<sup>む</sup>眠<sup>む</sup>る<sup>ひ</sup>人<sup>と</sup>々<sup>と</sup>の<sup>な</sup>中<sup>か</sup>に、<sup>ひ</sup>一<sup>と</sup>り<sup>さ</sup>覚<sup>め</sup>た<sup>か</sup>賢<sup>か</sup>き<sup>し</sup>人<sup>は</sup>は、  
<sup>お</sup>愚<sup>ろ</sup>かな<sup>ひ</sup>人<sup>を</sup>を<sup>は</sup>す<sup>て</sup>て、<sup>は</sup>走<sup>り</sup>行<sup>く</sup>。

Appamatto pamattesu / suttesu bahujāgaro  
Abalassamva sighasso / hitvā yāti sumedhaso.

Heedful among the heedless, wide awake among the slumbering, the wise man advances as does a swift horse, leaving a weak horse behind.

※仏陀から瞑想の重要性を教わった二人の比丘が、森の中で瞑想していた。一人の比丘は、早朝から、最初ゆっくり歩きながらの瞑想を、次に静止しながらの瞑想を、夜は夜で、横になりながら瞑想に集中していた。その結果、この比丘は短い時間で悟りを得たのである。もう一人の比丘は、朝起きるとたき火をおこして暖をとったり、時々若い新入りの沙弥たちと雑談したりして瞑想の修行をしていた。

やがて雨季も終わり、二人の比丘は久しぶりに仏陀を表敬訪問した。

そこで仏陀は、悟りを得た比丘を、「しっかり修行して、よく悟りを得た」とほめた。その時、もう一人の比丘が「尊者よ、どうして彼が一生懸命修業していたのかわかるのですか？私の知る限り、彼は毎日横になっているか、又は、寝ているかでした」と言った。「それではお前は、どうなのかね？」と仏陀がたずねると「私は、朝起きると火をおこし、暖まりながら瞑想をしていました。寝て時間を無駄にしていませんでした」と答えた。

そこで仏陀は、この比丘に、「お前は不放逸と放逸の意味を誤解しているよ。形だけ不放逸でも、中身が放逸では修行にはならない」と、駿馬と駄馬の例をとりながら、さとされたのである。  
(第 29 偈の因縁物語)

30. マガ<sup>せいねん</sup>青年は、不放逸<sup>はげみ</sup>によって、神<sup>かみ</sup>の上位<sup>じょうい</sup>についた。賢者<sup>けんじゃ</sup>によって、不放逸<sup>はげみ</sup>は、讚<sup>たた</sup>えられ、放逸<sup>なおざり</sup>は常に<sup>つね</sup>軽蔑<sup>けいべつ</sup>される。

Appamādena Maghavā / devānaṃ seṭṭhataṃ gato  
Appamādaṃ pasamsanti / pamādo garahito sadā.

By earnestness Maghavā rose to the lordship of the gods,  
Earnestness is always praised; negligence is always despised.



※ある日、マハーリ (Mahāli) という王子が仏陀の説法を聞いた時、その中に出てくる「サッカ」という人物と仏陀は以前から面識があるのではないかと思った。そこで王子が仏陀にたずねると「確かにサッカ (Sakka) という神を知っている。サッカの前世は、マチャラ (Macala) 村のマガ (Magha) という青年であった」と答えられた。

マガ青年と仲間の三十三人の青年たちは、皆のためにすすんで道路を作ったり、休憩所を建てたりするなど村の人々から喜ばれ、愛されていた。

マガ青年は、七つの信条をもって自分の人生を歩もうと心に決めていた。それは、(1) . 両親を養うこと、(2) . 先輩を尊敬すること (3) . 正しい言葉で語ること、(4) . あるいは言葉を言わないこと、(5) . 陰口を言わないこと、(6) . もの惜しみしないこと、(7) . 腹を立てないということであった。

以上の善行によってマガ青年は、死後、神々の中で最もすぐれた神サッカとして生まれ変わったのである。

(第 30 偈の因縁物語)

31. <sup>はげみ</sup>不<sup>たの</sup>放逸<sup>な</sup>を<sup>お</sup>楽しみ<sup>びく</sup>、<sup>な</sup>放逸<sup>お</sup>を<sup>お</sup>恐<sup>びく</sup>れる比丘は、たとへ  
<sup>ひ</sup>火<sup>ちい</sup>が<sup>お</sup>小さくても、<sup>お</sup>大き<sup>お</sup>くても、すべてのものを  
<sup>や</sup>焼<sup>つ</sup>き<sup>だい</sup>尽<sup>しょう</sup>くすように、<sup>そく</sup>大小<sup>ぼく</sup>の束縛<sup>や</sup>を<sup>つ</sup>焼<sup>つ</sup>き<sup>つ</sup>尽<sup>つ</sup>くしつ  
<sup>ね</sup>つ涅槃<sup>はん</sup>にいく。

Appamādarato bhikkhu / pamāde bhayadassi vā  
Saṃyojanam aṇum thūlam / ḍhamm aggīva gacchati.

The Bhikkhu who delights in heedfulness, and looks with fear on heedlessness, advances like fire, burning all fetters great and small.

※一人の比丘が、森の中で瞑想していたが、どうもうまく精神が集中できないので仏陀に特別に法を説いていただくかと相談に行った。その途中、比丘は火事で森の木が焼き尽くされていくのを山頂から目撃した。ふと、諸々の煩惱という木は、仏陀の教えの一つである「八聖道の実践」によって焼き捨てられるのではないかと考えた。仏陀は、この比丘の考えを聞いて、燃える火を例にとって説かれたのである。 (第 31 偈の因縁物語)

32. 精進<sup>はげみ たの</sup>を楽しみ、放逸<sup>なおざり おそ</sup>を恐れる比丘<sup>ビク</sup>は、道<sup>どう①</sup>・果<sup>か②</sup>の悟<sup>さと</sup>りが損失<sup>そんしつ</sup>するということはありません、まこと涅槃<sup>ねはん</sup>の近く<sup>ちか</sup>にいる。

Appamādarato bhikkhu / pamāde bhayadassi vā  
Abhabbo parihānāya / nibbānasseva santike.

The Bhikkhu who delights in heedfulness, and looks with fear on heedlessness, is not liable to fall. He is near to Nibbana.

※市場のある小さな町で育ったニガマヴァーシティッサ(Nigamavāsītissa)が比丘となった。ニガマヴァーシティッサは、食べ物の施しを受けるため「たく鉢」にでかける時、たくさん施しをしてくれる大長者アナータピンディカやパセナディ王の所を避け、縁者のいる小さな村をたく鉢するのであった。この比丘の生活はたいへん質素であった。

しかし、仲間の比丘たちは、この比丘が縁者のいる村にたく鉢するのを誤解した。比丘ニガマヴァーシティッサは親戚縁者と親交していると非難したのである。

そこで仏陀は、この比丘にたずねた。比丘は、「私は食べ物の施しを受けるためだけに村に出かけます。そして、施しの食べ物が豪華であろうが貧しかろうが気にしておりません」と答えた。

仏陀は、少欲知足の生活をするこの比丘をほめ、次の話をされたのである。

昔、ガンジス川のほとりにイチジクの木がたくさんある森に「オウム」の王がすんでいた。この王は、すこし他のオウムたちと違っていた。多くのオウムたちは、餌であるイチジクの実を食べ終わると別の森へ移動するが、この王はずうっと同じ森に留まっていた。

不思議に思った三十三天界のサッカ王とスジャータ王妃は、このオウムの王に「何故、お前だけがこの朽ちかけたイチジクの木に残っているのか？」とたずねた。

オウムの王は、「私はこの老木から生きるのに必要な最小限度の食べ物をいただいている。だからここを去る必要がない」と悠然と答えた。

その威厳のある態度に感激したサッカ王と王妃は、家臣に命じ、早速、ガンジス川の水をそのイチジクの老木の回りに引き込む工事をした。

おかげでこの老木は再び新しい枝をつけ緑豊かな木となって多くの実を実らせたのである。

(第 32 偈の因縁物語)

※①「道」と②「果」とは、第 21・22・23 偈の解説を参考にしてください。





### 第三 心の章 CITTA VAGGA (MIND)

33. ちょうど <sup>ゆみづく</sup>弓作り師<sup>し</sup>が矢<sup>や</sup>をまっすぐ直<sup>なお</sup>すように、  
賢<sup>けんじゃ</sup>者は、「所<sup>しよえん</sup>縁にたいして」ざわめき、動<sup>うご</sup>きや  
すく、守<sup>まも</sup>り難<sup>がた</sup>く、そして、抑<sup>おさ</sup>え難<sup>がた</sup>い心<sup>こころ</sup>を正<sup>ただ</sup>しく  
する。

Phandanam capalam cittam /  
dūrakkham dunnivārayam  
Ujum karoti medhāvi / usukārova tejanam.

The flickering, fickle mind, difficult to guard, difficult to control, – the wise person straightens it as a fletcher straightens an arrow.

34. ちょうど 水中の住処から陸に上げられた魚が  
 ぴょんぴょんと跳ね回るように、輪廻という  
 煩惱の悪魔を遮断するために、俗界から修行の  
 場に入ったこの心は、騒ぎ、跳ね回る。  
 それ故に、賢者は、あきらめることなく、その  
 心をまっすぐにすべきである。

Vārijova thale khitto / okamokata ubbhanto  
 Pariphandatidaṃ cittaṃ / Māradheyyaṃ pahātave.

Like a fish that is drawn from its watery home and thrown upon land, even so does this mind flutter. Therefore the realm of the passions should be shunned.

※比丘メギヤ(Meghiya)は、仏陀の身の回りを世話する比丘であった。

ある日、この比丘は、たく鉢の帰りによく成熟したマンゴの園を見つけ、この園の中でじっくり瞑想したいと思った。急いで僧院に帰り、仏陀にお願いしてすぐに出かけようとしたが、あいにく仏陀の世話をするほかの比丘たちが不在中であった。

イライラしながら彼らの帰りを待った比丘は、やっこのことでマンゴの園にくと、「瞑想に集中するぞ！」と張り切った。

しかし、期待したほどの瞑想ができなかった比丘は、肩を



落として仏陀のもとへ帰ってきた。

そこで仏陀は、まず自分の心の中の敵（煩惱）を征服することが肝要だと励まされたのである。

（第 33・34 偈の因縁物語）

35. 捕らえ難く、迅速で欲するところに飛んで行くその心を、制御することは、善いことである。  
よく制御された心は、安楽をもたらす。

Dunniggahassa lahuṇo / yatthakāmaṇipātino  
Cittassa damatho sādhu / cittaṃ dantaṃ sukhāvahaṃ.

This mind is hard to check, swift, settles wherever it likes :  
to control it is good. A controlled mind is conducive to  
happiness.

※ある雨季の頃、六十名の比丘たちが山ふもとの部落にやってきた。部落の頭領の母親であるマーティカマター（Mātikamātā）は、この六十名の比丘のために食べ物や日常生活に必要ないろいろなものを施したり、僧院を建てたりして、お世話をしていた。そして、比丘たちに正しい瞑想方法についてたずねた。そこで比丘たちは、彼女に「三十二観察」（註①）や「四念住観」（註②）などの瞑想方法を教えた。

マーティカマターは、教えられた瞑想を一生懸命行った結果、ついに、まだ六十名の比丘たちも到達していない悟りの第三段階である不還 (Anāgāmi) を得ると同時に、天眼 (Dibbacakkhu) という神通力も身につけたのである。

彼女は、新しく身につけた神通力で六十名の比丘たちを見ると、全員、悟りの第四段階である阿羅漢 (Arahat) を得る潜在能力をもっており、栄養バランスのとれた正しい食事さえとれば、それに到達できると洞察したのである。

そして、修行中の六十人の比丘たちは、マーティカマターが準備した食事と彼ら自身の努力によって、まもなく全員が阿羅漢の悟りを得たのである。

六十人の阿羅漢たちは、彼女にお礼を言い、仏陀のところへ帰って行った。そして、仏陀にマーティカマターのことを報告した。その報告を聞いた一人の比丘が、はるばる彼女をたずねた。

マーティカマターは、いつものように比丘が望んでいるものを満たしてあげようと、この比丘を見つめた。その時、比丘の心の中に悪い考えが生まれ、それを彼女に見透かされるのを恐れて、あわててその場を逃げ去った。

そこで仏陀は、この比丘に、まず自分の心の中にいる悪魔を征服せよと励まされたのである。

(第 35 偈の因縁物語)

#### ※註①「三十二身分観想」

この身体には、(1) 髪、(2) 毛、(3) 爪、(4) 齒、(5) 皮、(6) 肉、(7) 筋、(8) 骨、(9) 骨髄、(10) 腎臓、(11) 心臓、(12) 肝臓、(13) 肋膜、(14) 脾臓、(15) 肺臓、(16) 胃、(17) 腸、(18) 胃の中のもの、(19) 大便、(20) 脳髄、(21) 胆汁、(22) 痰、(23) 膿汁、(24) 血、(25) 汗、(26) 脂肪、(27) 涙、(28) 血清、(29) 唾、(30) 鼻汁、(31) 関節滑液、(32) 小便がある。

足の裏の上から、髪の毛の下まで、このようないろいろな不浄で覆われた身体の三十二身分を、繰り返し、繰り返し観察すれば、やがて、貪欲などの煩惱が次第に離れていき、初禅の境地にいたる。

(Dvattimsākāra)

Atthi imasmim kāye

- (1)Kesā, (2)lomā, (3)nakhā, (4)dantā, (5)taco,  
(6)maṃsaṃ, (7)nhāru, (8)aṭṭhi, (9)aṭṭhimiñjaṃ,  
(10)vakkaṃ, (11)hadayaṃ, (12)yakanāṃ, (13)kilomakaṃ,  
(14)pihakaṃ, (15)papphāsaṃ, (16)antaṃ, (17)antagunaṃ,  
(18)udariyaṃ, (19)karīsaṃ, (20)matthaluṅgaṃ,  
(21)pittaṃ, (22)semhaṃ, (23)pubbo, (24)lohitaṃ,  
(25)sedo, (26)medo, (27)assu, (28)vasā,  
(29)khelo, (30)siṅghāṇika, (31)lasika, (32)muttaṃ.

※註②「四念住観」

最も重要な仏典の一つであると言われている「Mahāsati-paṭṭhāna sutta」（大念住経）に説かれている。それには、命あるものを清め、憂い、悲しみ、悩み、苦しみを取り除き、正しい悟りに導く唯一の道が四念住観であり、①身(Kaya)、②受(vedanā)、③心(citta)、④法(dhamma)とそれぞれに念を集中させて行き、次に五つの障害の法(五蓋)から最後に四つの聖なる真理(四聖諦)を如法に観察して涅槃を得ることができると説かれている。

※①②について、やさしい日本語で説明された書籍として「南方仏教基本聖典」（ウ・ウェーブッラ世界平和パゴダ僧院長著・中山書房仏書林）と「南方上座部仏教のおしえ」（ウージョターランカーラ著）がある。

36. はなはだ<sup>みきわ</sup>見<sup>がた</sup>極め難いほど<sup>せんさい</sup>織細にして、<sup>よく</sup>欲すると  
ころに<sup>と</sup>飛んでいくこの<sup>こころ</sup>心<sup>けんじゃ</sup>を賢者は、<sup>まも</sup>守るべきで  
ある。<sup>まも</sup>守られた<sup>こころ</sup>心こそ、<sup>あんらく</sup>安楽をもたらす。

Suddasam sunipuṇam / yatthakāmanipātinam  
Cittam rakkhetha medhāvi / cittam guttam sukhāvaham.

The mind is very hard to perceive, extremely subtle , settles wherever it likes. Let the wise person guard it; a guarded mind is conducive to happiness.

※ある「金貸し」の息子が、いつも「たく鉢」にやっ  
てくる比丘に「どうすれば不幸な人生を歩まずにすむので  
すか？」と質問した。  
比丘は、「(1) 仕事をする事、(2) 家族を養う事、  
(3) 仏教に寄付すること。この三つを実践することです」  
と答えた。  
息子は、すでに教えられた三つを実行していたので、さら  
にたずねると、「次に、(1) 仏・法・僧を敬い、五つの戒  
律を守ること。(2) 十の戒律を守ること。(3) 出家して  
比丘になることです」と比丘は答えた。  
そこで、「金貸し」の息子は出家して比丘となった。比丘  
になると先輩の比丘たちから多くのことを教えられ、かつ、  
いろいろなことを学ばなければならなかった。それらに忙  
殺されたこの比丘は、だんだん消化不良の状態となり、心  
が乱れ、物事に集中できず、不満のある出家生活となっ  
たのである。

この比丘の悩みに気づいた仏陀は、「もし、自分の心をよく調えるものがあれば、その一つのことだけに専念しなさい。そして、自分の心をよく守りなさい」とアドバイスされた。後に、この比丘は、こつこつと修行を積み重ねた結果、悟りを得たのである。

(第 36 偈の因縁物語)

37. [心<sup>こころ</sup>は] 遠<sup>とお</sup>くに行き、一<sup>い</sup>人<sup>ひとり</sup>でさすらい、実<sup>じつ</sup>体<sup>たい</sup>は  
なく [心<sup>しん</sup>臓<sup>ぞう</sup>という] 洞<sup>どう</sup>窟<sup>くつ</sup>の中<sup>なか</sup>にひそむ [その心<sup>こころ</sup>を]  
よく制<sup>せい</sup>御<sup>ぎよ</sup>する人は、悪<sup>ま</sup>魔<sup>ま</sup>の束<sup>そく</sup>縛<sup>ばく</sup>から解<sup>かい</sup>放<sup>ほう</sup>される。

Dūraṅgamaṃ ekacaraṃ / asarīraṃ guhāsayam  
Ye cittaṃ saṃyamissanti / mokkhanti mārabandhanā.

The mind is faring far, wandering alone, bodiless, lying in a cave(chamber) of the heart. Those who subdue it are freed from the bond of Mara.

※比丘サンガラッキタ (Saṃgharakkhita) の甥<sup>せう</sup>が出家して比丘となった。

この甥の比丘が、叔父の比丘を表敬訪問した際、法衣を贈った。しかし、比丘サンガラッキタは「今は十分間に合っているから要らない」と、それを断った。もう一度すすめても断り続ける伯父の態度に甥の比丘は、たいへん落胆し「きっと伯父は私が比丘になるのに反対しているのだ」と

余計なことを考えた。ある日、甥の比丘は、伯父の比丘をヤシの葉の扇子であおぎながら、ぼやーと頭の中で次のことを空想し始めた。

『・・・私が、サンガを離れて還俗する。伯父に贈るつもりだった法衣を売り、代わりに雌ヤギを買い求める。その雌ヤギがたくさんの子ヤギを産み、私は所帯を持てるほどのお金がたまる。やがて、結婚して一人の子供ができる。その子供と妻をつれて小さな荷車で、伯父がいる僧院に会いに行く。その道中、私は抱いている子供を妻から受け取る時、子供を荷車から落とし、子供は車輪に引かれてしまう。半狂乱の私は、怒りにまかせ妻を殴ろうとする……』このようなことを空想しながら甥の比丘は、伯父の比丘サンガラッキタの頭をヤシの扇子で叩いていた。

「何故、私を叩くのかね?」「?」キョトンとしている甥の比丘に「お前は、空想の世界で妻を叩くことができなかった代わりに、私の頭を叩いているのかい?」と比丘サンガラッキタが言った。

自分のしていることにやっと気づいた甥の比丘は、驚愕してその場から消え去った。やがて、仲間の比丘たちに連れ戻された甥の比丘は、仏陀から次のようにアドバイスされたのである。

(第 37 偈の因縁物語)

38. <sup>こころ</sup>心は、ざわめき、<sup>うご</sup>動きやすく、<sup>ただ</sup>正しい<sup>ダンマ</sup>法を知ら  
ず、<sup>しんねん</sup>信念がゆらぐ<sup>ひと</sup>人の<sup>ちえ</sup>智慧は、<sup>けっ</sup>決して<sup>み</sup>満ちるこ  
とはない。

Anavaṭṭhitacittassa / saddhammaṃ avijānato  
Pariplavapasādassa / paññā na paripūrati.

He whose mind is not steadfast, he who does not know the true doctrine, he whose confidence waves – the wisdom of such a one will never be perfect.

39. <sup>むさぼり</sup>愛欲に<sup>こころ</sup>心が<sup>ぬ</sup>濡れることなく、<sup>いか</sup>怒りに<sup>こころ</sup>心が<sup>わずら</sup>煩わさ  
れることなく、<sup>ぜん</sup>善と<sup>あく</sup>悪とを<sup>はな</sup>離れた<sup>め</sup>目ざめた人  
<sup>アラハト</sup>阿羅漢に、<sup>おそ</sup>恐れはない。

Anavassutacittassa / ananvāhatacetaso  
Puññapāpaphīnassa / natthi jāgarato bhayaṃ.

He whose mind is steadfast, he who is not affected (by anger), he who has transcended both good and evil – for such a vigilant one there is no fear.

※汗だくになって働かなくても食事が与えられ、みんなから尊敬される比丘の生活にあこがれた一人の貧しい農夫が出家した。やがて、信者から寄進された贅沢な食事によって、痩せ細っていた身体が丸々肥えてきた。

しかし、その比丘は、出家の生活に不満を感じはじめた。そして、一生懸命働かなければ食事にはありつけなかった、以前の生活がなつかしくなった比丘は、サンガを出て還俗した。

しかし、元の貧しい百姓生活に戻ってみると、やはりあの気楽な出家の日々が懐かしくなり、再び比丘になった。

結局、出家と還俗を六回も繰り返したこの男は、ある日、妊娠中の妻のだらしない寝姿を見て、この世の無常と苦しみを感じ、七回目の出家を決意した。そして、サンガに戻る途中の瞑想によって、悟りの第一段階である預流果を得た。雑役係という形でやっとサンガへの再入団を許された比丘チッタハッタ (Cittahattha) は、真剣に修業に打ち込み、わずかの間に悟りの第四段階である阿羅漢を得た。

それを知らない他の比丘たちは、「もうそろそろ還俗するころではないのか？」と比丘チッタハッタをからかうと、「私は、世俗との縁を断ち、以後、還俗することはありません」と返事した。彼は嘘をついているのではないのかと比丘たちが仏陀にたずねた。

そこで、仏陀は、「比丘チッタハッタは嘘を言っていない。そして、比丘チッタハッタと同じ様に、かつて私も前世において出家と還俗を七回繰り返したことがある」と言われたのである

昔、クダーラパンディタ (kuddālapaṇḍita) という男が出家して比丘となり、ヒマラヤ山中で八ヶ月間修行をしていた。ある雨季の夜、比丘クダーラは大地が雨で湿ったのを見て、「家に確か豆の種と鍬があったはずだ。今種をまくのに絶



好の時だ。この時期を逃してはならない」と思うやいなや、いそいそと山を降りて自分の家に帰り、豆と種と鋤を持つと畑へ行き豆の種をまき始めた。やがて、豆が大きくなり、収穫すると、食料用と種用とに分けて家の倉庫に貯蔵した。その作業が一段落した時、男はふと自問した。「おれはここで何をしているのであろう？確かおれは、出家して比丘となり、ヒマラヤ山中で八ヶ月間修行していたはずだ。何故、ここで畑仕事をしているのだ」

男はそれに気づくと、急いで山に戻り再び比丘の生活に戻った。しかし、又、大地が雨で湿る雨季になると、再び家の「豆の種」と「鋤」を思い出し、そして山を降りては豆まきをはじめ、収穫を終えると、又、出家するということを六回繰り返した。

さすがに七度目の時、この男は真剣に考えた。「私は、すでに六回も還俗と出家を繰り返している。原因は、あの豆の種と鋤だ」と反省すると、その豆の種と鋤を手にとってガンジス川へ行き、再び手に取ることがないようにと、目隠しをして、思い切り遠くの方へ、その豆と鋤を川へ投げた。そして、「私は勝った。私は勝った」と大声で叫んだ。その時、地方の盗賊たちを鎮圧していたベナレスの王が、この声を聞いた。早速、その男を探し出した王は「今、私は、この地方を荒らし回る盗賊どもを退治したところだ。そして、家来どもと勝どきの声をあげようとするその直前に、お前が『私は勝った。私は勝った』と叫んだ。見るところ、お前が倒したと思われる敵の姿がこの周りに見当たらない。これは一体どういうことだ。お前は、一体だれに勝ったのだ」と王はたずねた。

「王よ、あなたは外の敵に勝たれたのでございます。私は、心の内なる敵・欲望という名の盗賊を打ち負かしたのでございます。この私の勝利こそ、まことの勝利でございます」と男は答えた。

男の言葉に感銘した王は、しばらく沈黙して、突然、自分の髪を切った。そして、家来共々出家して比丘になった。仏陀は、その話の終わりに「じつに七回も出家・還俗を繰り返した男というのは、前世の私である」と述べられたのである。(第 38・39 偈の因縁物語)

40. この身は、水瓶のようにこわれやすいものであ  
ると知り、この心を城のように防備し固めよ、  
智慧を武器として、[煩惱という]悪魔と戦え。  
勝ちとった[勝利を]守り、新たな執着をもた  
ず、よくところを調べよ。

Kumbhūpamaṃ kāyamimaṃ viditvā /  
nagarūpamaṃ cittamidaṃ thapetva  
Yodetha māraṃ paññāvudhena /  
jitañca rakkhe anivesano siyā

Realizing that this body is (as fragile) as a jar, establishing this mind ( as firm) as a (fortified) city, He should attack Mara with the weapon of wisdom. He should guard his conquest and be without attachment.

※五百人の比丘たちが、悟りを求めて長い修行の旅をしていた。やっとのことである村に到着した比丘たちは、村の人々からいろいろな施しを受け、瞑想にふさわしい森を教えてもらった。早速、五百人の比丘たちはその森に出かけ、瞑想をはじめた。しかし、その時から比丘たちの前に気持ちの悪い事件が続発した。夜、比丘たちが木の下で瞑想していると、突然、首だけが闇夜に浮いていたり、又、別の夜、首のない体が森を駆けたりするなど比丘たちの心を惑わし、怖がらせた。これでは瞑想どころではないと判断した比丘たちは、いそいそと森を後にして仏陀のところに戻って来た。

これは以前からこの森に住んでいる鬼神の仕業であった。鬼神たちは、黄色い奇妙な服装をしたこの比丘の集団を森から追い出すために、いろいろなトリックをして彼らを脅かしたのである。

比丘たちの報告を聞き終えた仏陀は、「明日の朝、再びその森へ出発するように」と言われた。

一同、びっくりして「あんな怖い所へ二度と行きたくありません」と嫌がった。仏陀は「出発の際、一人ひとりに武器を授ける」と皆を安心させた。

「一体どんな武器をくださるのか」と楽しみにしながら比丘たちは朝を迎えた。

仏陀は、全員に「慈経」(Metta sutta) (注①)というお経を授けた。このお経は《・・・他の賢者たちから非難されるような下劣なことを決して行ってはならない。一切の生き物は幸福であれ、安泰であれ、安楽であれ。》などが説かれていた。

五百人の比丘たちは、このお経を唱えながら森の中に静かに入って行った。森の鬼神たちはこのお経の教えを聞いて、比丘たちに対する誤解を解いた。そして、鬼神たちは、比丘たちを信頼するようになり、平和な森の生活が始まっ

た。比丘たちは、おかげで瞑想に集中することが出来、次から次へと悟りを得たのである。（第 40 偈の因縁物語）

※注①「慈経」(Karaniya metta sutta).

Karaniya – mattha kusalena – yantaṃ santaṃ padaṃ abhisamecca;  
Sakko ujū ca sūjū ca – suvaco c'assa mudu anatimānī.

このお経の徳をうけるには、修業する能力があり、（身・語は）正しく、心と静寂なる涅槃を直観して、さらに、率直で忠告をすなおに受け入れ、柔和で高慢であってはならない。

Santussako ca subhara ca – appa kicco ca salla huka vutti;  
Santindriyo ca nipako ca – appagabbho kulesu ananugiddho.

小欲知足であり、[信者の人が] 養い易く、雑務が少なく、生活は簡素であり、諸々の感覚は静まり、深い思慮があり、（身・語・意において）粗暴なく、信者の人々にたいして貪欲を起こしてはならない。

Na ca khuddaṃ samācarē kiñci – yena viññū pare  
upavadeyyuṃ; Sukhino vā khemino hontu – Sabbe sattā  
bhavantu sukhittā.

他の賢者たちから非難されるような下劣なことを決してしてはならない。生きとし生けるものは幸福であれ。安泰であれ。安楽であれ。

Yēkēci pāṇa bhūt'atthi – tasā vā thāvarā vā anava sesā;  
Dīghā vā ye mahantā vā – majjhimā rassakā aṇuka\_thūlā.

臆病なもの、強いもの、長いもの、大きいもの、中くらいのもの、短いもの、微細のもの（貝や亀など）平たいもの、見たことのあるもの、見たことのないもの、遠くに住むもの、近くに住むもの、すでに生まれたもの、これから生まれようとするもの、生きとし生けるもの全てが安楽であれ。

Na paro paraṃ nikubbetha – nāti maññetha kathhaci naṃ kañci;  
Byārosanā paṭigha saññā – nāññā – maññassa dukkha miccheyya.

どんな場合でも人をだますな。人を軽んじるな。身・語の悪害や怒りによってお互い他人の苦しみを願ってはならない。

Mātā yathā niyaṃ puttam – āyusā eka puttam anurakkhe;  
Evam pi sabba bhūtesu – mānasam bhāvaye aparimāṇam.

母親が自分の子を命をかけて守るように、生きとし生けるもの全てにたいして無量の（慈しみの）心をおこせ。

Mettañ ca sabbalokasmiṃ – mānasam bhāvaye aparimāṇam;  
Uddham adho ca tiriyañ ca – asambādham averaṃ asapattam.

全ての世界にたいして、上に、下に、横に、無量の慈しみの心を広く、（内なる）敵の恨みもなく、（外の）敵の障害もないように修行せよ。

Tiṭṭham caraṃ nisinno vā – sayāno vā yāvat'assa  
vigatamidhho; Etaṃ satim adhiṭṭheyya – brahma mētam  
vihāraṃ idham āhu.

立っていても、歩いていても、座っていても、横になっていても、眠らない限りは、この慈しみの念をしっかりと持たなければならない。これが最高の生き方であると仏陀は説かれたのである。

*Diṭṭhiñ ca anupagamma – sīlavā dassanena sampanno;  
kāmesu vineyya gedhaṃ – na hi jātu gabbhaseyyaṃ punaretī ti.*

この慈しみの修行を行う人は、我見にとらわれず、戒めを持ち、知見を備え、五欲にたいする貪欲を除き、再び母胎に宿ることはないであろう。

41. おお、この身は遠<sup>みとお</sup>からず、やがて意識<sup>いしき</sup>がなくなり、捨<sup>す</sup>てられて、使<sup>つか</sup>いみちのない丸太<sup>まるた</sup>のように、大地<sup>だいち</sup>の上<sup>うえ</sup>に横<sup>よこ</sup>たわるであろう。

*Aciraṃ vata'yaṃ kāyo / pathaviṃ adhisessati  
Chuddho apetaviññāṇo / nirattaṃva kalingaraṃ*

Sadly before long this body will lie on the earth cast away,  
devoid of consciousness, just as a useless wooden log.

※仏陀から瞑想の大切さを教えられた一人の比丘が、早速、森の中で瞑想にはげんだ。しかし、修行中に一種の腫れ物

が体にでき、それが体中に広がり、ウミと血で悪臭を放つようになった。仲間の比丘は、この悪臭を放つ比丘をプーティガッタティッサ（Pūtigattatissa）と呼び、仲間外れにした。

自分に対するきびしい禁欲と腫れ物による痛みの中で比丘プーティガッタティッサは、瞑想を続けた。

仏陀は、仲間から置き去りにされ、悲惨な状態で修行を続けているこの比丘を感知した。同時に、彼はすぐに悟りの第四段階である阿羅漢を得るであろうと洞察した。

仏陀は、比丘プーティガッタティッサをたずね、悪臭のするその身体を温かい水できれいに洗われ、手厚く看護された。

そして、比丘の横に腰を掛けながら肉体のはかなさについて説かれたのである。

仏陀の手厚い看護のおかげにより、健康を回復した比丘プーティガッタティッサは、再び修行に励み、ついに阿羅漢の悟りを得、その後亡くなったのである。

（第 41 偈の因縁物語）

42. 強盗<sup>ごうとう</sup>が他<sup>た</sup>の強盗<sup>ごうとう</sup>を<sup>み</sup>て [不幸<sup>ふこう</sup>や損害<sup>そんがい</sup>を] なす<sup>こうい</sup>行為  
 よりも、そして、又、憎<sup>にく</sup>しみ<sup>また</sup>を<sup>も</sup>持つ<sup>もの</sup>者が、  
 他<sup>ほか</sup>の憎<sup>にく</sup>しみ<sup>も</sup>を<sup>も</sup>持つ<sup>もの</sup>者<sup>み</sup>を見て [不幸<sup>ふこう</sup>や損害<sup>そんがい</sup>を] なす  
 行為<sup>こうい</sup>よりも、悪<sup>あく</sup>に<sup>ひ</sup>引き<sup>と</sup>留<sup>と</sup>め<sup>と</sup>られた<sup>こころ</sup>心こそ、  
 もっと<sup>わる</sup>悪い<sup>あくぎょう</sup>悪<sup>と</sup>行<sup>と</sup>をなす。

Diso disaṃ yaṃ taṃ kayirā / verī vā pana verinaṃ  
 Micchāpaṇihitaṃ cittaṃ / pāpiyo naṃ tato kare.

Whatever (harm) an enemy would do to an enemy, and a robber would do to a robber, an ill – directed mind can do to far greater(harm).

※大長者アナータピンディカに、お金持ちで人生を大いに楽しんでいる牛飼いナンダ (Nanda) という男がいた。ナンダは、牛飼いの仕事や国王の歳入を運営することによって彼自身の財産を保持していた。彼は、再三、高価な乳製品などの土産を持参してアナータピンディカの屋敷を訪れ、仏陀の説法を聞いた。そして、仏陀に自分の家に招待したいと申し出た。

しかし、仏陀は、彼の智慧が熟すまで招待に応じることを差し控えた。ある日、仲間の比丘たちと「たく鉢」をしている時、仏陀はナンダの智慧が熟したことを感知した。そして、「たく鉢」の途中からナンダの家に向かい、その近くにある木の下に座った。ナンダは仏陀のところへ行き、親しく挨拶をして家に案内した。そして七日間、仏陀を



はじめ多くの比丘たちを大いにもてなし、彼は仏陀の説法聞いて、悟りの第一段階である預流果を得た。

仏陀が帰る時、ナンダは仏陀の「鉢」を持ってかなりの道をいっしょに歩き、見送った。

「もうここでよい、ナンダよ」という仏陀の一言で、ナンダは足を止め、仏陀にうやうやしく挨拶すると、家路に向かった。そして、家に着くやいなや、ひとりの狩人に矢を射られ、殺された。

この悲劇を知った比丘たちが、仏陀のところへ行き、「師よ、あなたがナンダの家を訪ねたのが原因で、ナンダはたくさん施しを行い、あなたを見送り、そして、家に着くなり殺された。もし、あなたがナンダの家へ行かなければ、彼は死ぬことはなかった」と言った。

そこで仏陀は、「比丘たちよ、私がナンダを訪問しようが、しまいが、又、ナンダが、どの方角から帰宅しようが、彼は死から逃れることはできなかった。そして、悪に引き留められ、買収された心は、強盗も憎しみを持つ者もなさぬ悪行をこの世の生きとし生けるものに行い、不幸にする」と説かれたのである。説法を聞いた比丘たちは、ナンダの前世について仏陀に質問しなかった。仏陀も、それについて何も語らなかった。

(第 42 偈の因縁物語)

43. じつに<sup>はは</sup>母も、<sup>ちち</sup>父も、あるいは、その<sup>た</sup>他の<sup>しんるい</sup>親類  
たちも、その<sup>ひと</sup>人を [ <sup>しあわ</sup>幸<sup>せ</sup>に ] することはできない。  
ただ、<sup>ただ</sup>正しく<sup>む</sup>向けられた<sup>こころ</sup>心だけが、その<sup>ひと</sup>人をよ  
り<sup>しあわ</sup>幸<sup>せ</sup>にする。

Na taṃ mātā pitā kayirā / aññe vāpi ca nātakā  
Sammāpaṇihitaṃ cittaṃ / seyyaso naṃ tato kare

A mother or father or any other close relative cannot make him happy. A well directed mind could make him much happier.





## 第四章 花の章 PUPPHA VAGGA (FLOWERS)

44. <sup>だれ</sup>誰がこの [<sup>ごうん①</sup>五蘊<sup>からだ</sup>の身体という] <sup>だいち</sup>大地を、  
[<sup>しあくしゆ②</sup>四悪趣という] <sup>ししゃ</sup>死者の<sup>せかい</sup>世界を、<sup>かみがみ</sup>神々と<sup>とも</sup>共なる  
[<sup>にんげん</sup>人間の] <sup>せかい</sup>世界を<sup>けんとう</sup>検討し<sup>せんたく</sup>選択するだろうか？  
ちようど<sup>じゆくれん</sup>熟練した<sup>にわし</sup>庭師が<sup>たく</sup>巧みに<sup>はな</sup>花をつみ<sup>あつ</sup>集める  
ように、よく<sup>と</sup>説かれた<sup>ほつく③</sup>法句を<sup>えら</sup>選び<sup>と</sup>取るだろうか？

Ko imaṃ pathaviṃ vicessati / yamalokañca imaṃ sadevakam  
Ko dhammapadaṃ sudesitaṃ / kusalo pupphamiva pacesati.

Who will comprehend this earth (self). The world of Yama, and this world together with the devas? Who will investigate the well – taught Path of Virtue (Dhammapada), even as an expert (garland – maker) will pick and choose flowers?

45. おし <sup>まな</sup>を <sup>じっせん</sup>を <sup>ゆうがく④</sup>を <sup>ひと</sup>を、 <sup>ひと</sup>を、

[<sup>ごうん</sup>の <sup>からだ</sup>という] <sup>だいち</sup>を、 [<sup>しあくしゅ</sup>という]

<sup>ししゃ</sup>の <sup>せかい</sup>を、 <sup>かみがみ</sup>と <sup>とも</sup>に <sup>にんげん</sup>の <sup>せかい</sup>を <sup>けんとう</sup>し

<sup>せんたく</sup>することができる。 <sup>ゆうがく</sup>の <sup>ひと</sup>こそ、 <sup>ちやうど</sup>

<sup>じゆくれん</sup>した <sup>にわし</sup>が <sup>たく</sup>に <sup>はな</sup>を <sup>あつ</sup>つみ <sup>あつ</sup>めるように、 <sup>よ</sup>

<sup>と</sup>く <sup>と</sup>説 <sup>ほつく</sup>かれた <sup>えら</sup>法 <sup>と</sup>句 <sup>と</sup>を <sup>と</sup>選 <sup>と</sup>び <sup>と</sup>取 <sup>と</sup>ることができる。

Sekho pathaviṃ vicessati / yamalokañca imaṃ sadevakaṃ  
Sekho dhammapadaṃ sudesitaṃ

/ kusalo pupphamiva pacesati.

The learner who practices the Dhamma and has entered the Path, but has not yet become an arahat shall comprehend this earth , the world of Yama and the world of humans together with the world of devas. The learner shall investigate the well – taught Path of Virtue(Dhammapada) as an expert (garland – maker) will pick and choose flowers.

※ある夜、仏陀といっしょに村々を歩き、布教の旅をした  
五百人の比丘たちが、その道中で見て来たいろいろなこと  
について雑談していた。特に、大地について、その広さや  
形、色の違い、土や砂などについて大いに話しているところ  
へ仏陀が来られた。仏陀は「外界にある大地よりも自分  
自身の中にある五蘊の身体という大地について、瞑想に集  
中することについて語りなさい」とアドバイスされた。

(第 44・45 偈の因縁物語)

- ※ ①：五蘊の（1）色(rūpa)とは、暑さ、寒さなどの反対の原因によって変化する地・水・火・風などの物質や肉体。
  - （2）受 (vedanā) とは、対象（所縁）の苦・楽を感受する心所。
  - （3）想 (Saññā) とは、対象を想念する心所。
  - （4）行(saṅkhāra)とは、対象へ働きかける思(cetanā)を中心とする心所。
  - （5）識 (viññāna) とは、対象を知る種々の心。
- ※ ②：四悪趣 (cattāro - apāyā) とは、（一）地獄、（二）餓鬼、（三）畜生、（四）阿修羅。
- ※ ③：法句とは、パーリ語の Dhammapada 『ダンマパダ』のことで、仏陀が説かれた真理の言葉という意味。
- ※ ④：「有学 (sekha) の人」とは、第四段階の悟りにいたる前の第一段階の預流、第二段階の一來、第三段階の不還までの聖者を言う。
- ※ 「無学の人」 (Asekha)とは、悟りの第四段階を得、煩惱を完全に遮断した阿羅漢を言う。この世において、学ぶものがない人。

46. この身体は、泡のようであると理解し、陽炎の  
ようであると洞察する人は、悪魔の花のような  
〔業・煩惱・異熟<sup>①</sup> という三つの〕輪廻を断ち切っ  
て、死王が見ることができない〔涅槃に〕行く  
べきである。

Phenūpamaṃ kāyaminaṃ viditvā /  
marīcidhammaṃ abhisambudhāno  
Chetvāna mārassa papupphakāni /  
adassanaṃ maccurājassa gacche.

Knowing that this body is like foam, and comprehending its mirage – nature, one should destroy the flower – shafts of sensual passions (Mara), and pass beyond the sight of the king of death.

※仏陀から瞑想の大事さを教えてもらった一人の比丘  
が、森へ行き、瞑想にはげんでいた。しかし、一生懸命瞑  
想しているにもかかわらず阿羅漢の悟りを得ることができ  
なかった。そこで比丘は、自分の修行で欠けている点を仏  
陀から指摘していただくとうと仏陀のところへ出かけ、その  
途中で蜃気楼を見た。  
「この世のすべてのものは、蜃気楼のように実体のないも  
のである」と感じた比丘は、その場でしばらく瞑想した。  
再び仏陀のもとへ向かった比丘は、アチラウァティ川  
(Aciravati)で旅で汚れた体を洗い、激流のそばにある大



きな木の下に座った。比丘は激流をじっと見続けながら「この世のすべてのものは、常に変化し続けている」と、感じた。そして比丘は仏陀に道中で感じたことを話した。仏陀は、それは正しい真理であると説かれたのである。  
(第 46 偈の因縁物語)

※①「異熟」(Vipāka)とは、善悪の業の結果である。

47. [綺麗な]花ばかりを摘み集めるように、  
五欲<sup>ごよく①</sup>において未だ<sup>いま</sup>得<sup>え</sup>てないもの欲<sup>よく</sup>し、得<sup>え</sup>たもの  
に執着<sup>しゅうちやく</sup>している人<sup>ひと</sup>を、ちょうど洪水<sup>こうずい</sup>が眠りこ  
けた村<sup>むら</sup>を[押し流<sup>おなが</sup>す]ように、死王<sup>しおう</sup>は、連れ去<sup>つ</sup>っ  
て行く<sup>さ</sup>。

Pupphāni heva pacinantam / byāsattamanasam naram  
Suttaṃ gāmaṃ mahoghova / maccu ādāya gacchati.

The man who gathers flowers (of sensual pleasure), whose mind is distracted, death carries off as a great flood sweeps away a sleeping village.

※大国コーサラ国の王子パセナディ (Pasenadi) は、シャカ族の姫を自分の妻にしたいと強く望んでいた。小国のシャ

カ族は、この結婚話を断ることができず、姫の代わりに別の一族マハーナーマ王に仕える侍女をシャカ族の姫と偽ってコーサラ国に差し出した。そして、彼女はすぐに身ごもり、ウィタトーバ(Vitatūbha)王子を生んだ。

ウィタトーバ王子が十六歳の時、母親の故郷のカピラヴァット城を訪問され、シャカ族一門から丁重なもてなしを受けた。そして、盛大な宴会の日々を楽しんだ王子は、シャカ族にお礼を言い、帰国の途についた。

その途中、家臣の一人が忘れ物を取りにカピラヴァット城に引き返し、宴会の間にはいると、「ここに娘の子供が座っていた。ここに娘の子供がすわっていた・・・」と言いながら年老いた奴隷女が、ウィタトーバ王子が座っていた席をミルクで洗い清めていた。

この衝撃的な報告を家臣から聞くやいなや王子は激怒して「私が王になった時、必ずシャカ族たちの喉の血で私の座っていたあの席を洗らってやる」と、かたく心に誓った。

その言葉どおりコーサラ国の王となったウィタトーバは、シャカ族を攻め、情け容赦のない大虐殺を行ったのである。但し、マハーナーマ族の一部の人々は許された。

シャカ族を攻め滅ぼしたウィタトーバ王とその軍隊は、帰路、アチラヴァット川(Aciravati)の砂洲で一泊するために野営キャンプを張った。その夜、川の上流で降った豪雨がアチラヴァット川に流れ込み、激流となって眠りこけている王や兵隊たちを襲い、押し流した。

(第 47 偈の因縁物語)

※①「五欲」とは、色・声・香・味・触に対する愛着。

48. わき<sup>め</sup>目もふらず [奇麗<sup>きれい</sup>な] 花<sup>はな</sup>ばかりを摘<sup>つ</sup>み

集<sup>あつ</sup>め、得<sup>え</sup>ていないものを欲<sup>よく</sup>し、得<sup>え</sup>たものに執<sup>しゅう</sup>着<sup>ちやく</sup>  
して、五<sup>ご</sup>欲<sup>よく</sup>において飽<sup>あ</sup>くことを知<sup>し</sup>らない人<sup>ひと</sup>を、  
死<sup>し</sup>王<sup>おう</sup>が思<sup>おも</sup>いのま<sup>ま</sup>に操<sup>あやつ</sup>る。

Pupphāni heva pacinantam / byāsattamanasam naram  
Atittaññeva kāmesu / antako kurute vasam

The Destroyer brings under his sway the man who gathers flowers ( of sensual pleasure), whose mind is distracted, and who is insatiate in desires.

※コーサラ国の首都サーヴァティー (Sāvatti) から来た女性で、名をパティプージカ・クマーリー (Patipūjika Kumāri) と言い、16歳の時に結婚して四人の子供に恵まれた。

もの惜しみしない彼女は、皆から愛され、又、比丘たちにもいろいろな物を進んで施していた。

時々、彼女は僧院を訪れ、きれいに掃除をして花を生け、薫りのよい香を焚いたりしては「どうぞ、私を夫のいる天界にもどしてください」と心の中で祈るのであった。

クマーリーには、自分の前世を追憶できる智慧 (Jātissarañña) があり、自分は三十三天界

(Tāvatisa) の王マーラバーリー (Mlabhri) の妻で、神々や美しい妖精たちといっしょに木に登って遊んでいた時、ふとした弾みで枝から落ちて、人間界に生まれ変わったことを知っていた。

ある日、クマーリーは病に倒れ、その日の夜、息を引き取った。

そして、彼女は望みどおり、三十三天界に生まれ変わり、夫のマーラバーリ王に会った。「クマーリーよ、君は午前中どこで遊んでいたのかね？」と王が尋ねた。クマーリーは、微笑しながら夫に今までのことを語り始めたのである。  
(第 48 偈の因縁物語)

49. ちょうど、<sup>はち</sup>蜂が<sup>はな</sup>花の<sup>いろ</sup>色と<sup>かお</sup>香りをそこなわないで

ただ<sup>みつ</sup>蜜だけを<sup>と</sup>取って<sup>と</sup>飛<sup>と</sup>び去<sup>き</sup>るように、

<sup>びく</sup>比丘は、<sup>むら</sup>村において <sup>ひとびと</sup>人々の<sup>しんこう</sup>信仰と<sup>ざいさん</sup>財産とをそこな  
わないで<sup>はつ</sup>たく<sup>おこな</sup>鉢を<sup>おこな</sup>行<sup>おこな</sup>うべきである。

Yathāpi bhamaro pupphaṃ / vaṇṇagandhamahēṭhayāṃ  
Paleti rasamādāya / evaṃ gāme munī care.

As a bee without harming the flower, its colour or scent, flies away, collecting only the honey, even so should the sage wander in the village.

※コーサラ国のある村に、コーシヤ (Kosiya) というたいへん「けち」な金持ちがいた。富豪コーシヤは、自分に対しても他人に対しても、草の葉先についた油の一滴もあげないほど「けち」であった。  
ある日、王を表敬訪問した帰り道、コーシヤは一人の痩せ細った男がお菓子をガツガツ食べているのを見て、急にお

なかが減りだし、無性にお菓子が食べたくなかった。思わず「お菓子が食べたい」と言いかけた口をあわてて手で押さえ、まわりを見渡した。「もし、誰かにこれを聞かれたならば、お菓子を食べたい連中が押し寄せ、私はそのために余計なお金を使わなければならない。人知れずお菓子を作り、自分一人で食べよう！そのためにお菓子を作る場所を探さなければ」とコーシヤは空腹を我慢しながら村のあっちこっちを歩き回った。

しかし、適当な場所がなかなか見つからず、激しい疲労と空腹でコーシヤの身体が、だんだん黄色くなっていき、ついにベッドに倒れた。

「あなた、あなた、一体どうしたのですか？」という声に気がついたコーシヤに、妻が夫の背中をさすりながらたずねた。

「いや、なんでもない」「何か嫌なことを王様から命じられたのですか？」「いや、そんなことはない」「家族の誰かがあなたに不愉快な思いをさせたのですか？」「いや、決してそんなことはない」「じゃー、・・・何か欲しいものでもあるのでしょ？」という妻の言葉に、コーシヤは思わず「ごっくん」と喉を鳴らし、唾を飲み込んだ。

「一体何が欲しいのです？」

「・・・お菓子」

妻は夫を真面目に心配したことを後悔し、又、その頑固さに呆れ果てた。そして、コーシヤと妻は自宅の屋上で密かにお菓子作りを始めた。

やっとお菓子ができ上がる頃、いつの間にか黄色い法衣を着た男が手に丸いボールを抱えて立っていた。

驚いた二人は、すばやくこの男を観察した。この比丘こそ、仏陀の偉大な弟子であり、神通力を持っていることでも有名なマハーモッガラナ長老であった。長老は、この夫婦に悟りへの第一段階を得る潜在能力があることを洞察され

た仏陀の命により、その神通力を使ってこの屋上にやって来たのである。

「どうやってここへ来たのだ！」というコーシヤの問いに、マハーモッガラナ長老は黙って立っていた。薄気味悪くなったコーシヤは妻に「お菓子のかけらでも施してやれ」と言った。妻はバスケットから一片を取り、長老のたく鉢の「鉢」に入れた途端、たちまち大きくなった。

あわてたコーシヤは「大きいのをやってはいかん！小さいやつだ！小さいやつ！ええいー、わしがする」と言うと、自分の手でバスケットから小さいお菓子を取り上げ「鉢」に入れた。今度は全部のお菓子がそれにくっついてきた。二人は、何とかそれを切り離そうと力一杯引っ張ったが、うまくいかなかった。その時、マハーモッガラナ長老は、コーシヤにお菓子の施しを願ったのである。

「妻よ、もうお菓子はいないから、この方に全部あげなさい」とコーシヤは疲れ切った声で言った。

そこで長老は、「仏陀がお二人を待っておられる。一緒に会いに行きましょう」と声をかけ、コーシヤと妻を仏陀の元へ案内した。

そして、この夫婦は、仏陀の説法を聞いて悟りの第一段階である預流果を得た。次の夜、比丘たちは、マハーモッガラナ長老の活躍について語り合った。そこへ仏陀がこられ、「マハーモッガラナ長老は、施しをする人の信条や財産を損なわずに施しを受けたように、比丘たちよ、人々から施しを受ける時は、その人の信条や財産を損なってはならない」と説かれたのである。（第 49 偈の因縁物語）

50. 他人の過失や、他人が何をしたか、何をしな  
かったかを見<sup>み</sup>てはならない。自分<sup>じぶん</sup>は、何を<sup>なに</sup>為<sup>な</sup>し  
たかのみ<sup>み</sup>を見るべきである。

Na paresaṃ vilomāni / na paresaṃ katākataṃ  
Attanova avekkheyya / katāni akatāni ca.

Do not seek others' faults, things left done and undone by others, but seek one's own deeds done and undone.

※ 富豪家のある婦人が、ジャイナ教の裸行者パーウエヤ (Pāveyya) を養子に迎え、よく世話をしていた。ある日、彼女は、近所の人々から仏陀のうわさを聞いて、ぜひ仏陀を家に招待したいと思った。そして、その希望が現実となった日、婦人は仏陀と比丘たちにたくさんの御馳走を施し、大いにもてなした。しかし、養子のパーウエヤ裸行者はこの場には姿を見せず、隣の部屋にいて仏陀を深く尊敬するようになった義母に腹を立てていた。そして、仏陀の説法を熱心に聞いている義母の心を乱し苦しめるために呪文を唱えはじめた。パーウエヤの呪文によって説法を聴聞することに集中できなくなり、苦しんでいる彼女に仏陀は、「そのような呪文など気にせず、ただ自分の行動の善悪についてのみ心を集<sup>み</sup>中しなさい」と説かれたのである。

(第 50 偈の因縁物語)

51. 色麗いろ うつくしいけれどかお香りがはなない花のように、よく  
説とかれたせいてん聖典のことば言葉もじっせん実践ひとしない人には、  
利益りえきをもたらさない。

Yathāpi ruciram̐ puppham̐ / vaṇṇavantam̐ agandhakam̐  
Evam̐ subhāsītā vācā / aphalā hoti akubbato

As a flower that is lovely and beautiful but is scentless, even so fruitless is the well – spoken word of one who does not practise it.

52. 色麗いろ うつくしくよいかお香りがはなする花のように、よく  
説とかれたせいてん聖典のことば言葉じっせんを実践ひとする人には、すばらしい  
利益りえきをもたらず。

Yathāpi ruciram̐ puppham̐ / vaṇṇavantam̐ sagandhakam̐  
Evam̐ subhāsītā vācā / saphalā hoti sakubbato

As a flower that is lovely, beautiful ,and scent-laden, even so fruitful is the well – spoken word of one who practises it.



※チャッタパーニ (Chattapāni) は、在家の信者であったが、すでに悟りの第三段階である不還 (Anāgāmi) を得、僧院によく来ては仏陀の説法を聞いていた。

ある日、チャッタパーニが説法を聞いているところへパセナディ王がやって来た。その時、チャッタパーニは座ったままで王を迎えた。王は、この無礼に怒ったが、仏陀の手前怒りを顔にあらわさなかった。

王の気持ちを察した仏陀は、「チャッタパーニは在家の者であるにもかかわらず、よく教えを実践している」とたいへん誉めた。王は、それほどの人物ならば、先程の無礼は咎めないでおこうと気持ちを変えた。

そして、王は、二度目にチャッタパーニと会った時、ぜひ宮廷にいられて二人の王妃に「法 (Dhamma)」についてご教授していただきたいと願った。

そこで仏陀は、チャッタパーニの代わりにアーナンダ (Ānanda) 尊者を宮廷に訪問させ、マツリカー (Mallikā) とヴァーサバカッティヤー (Vāsabhakhattiyā) の二人の王妃を教授させた。

しばらくして仏陀は、アーナンダ尊者に二人の王妃の学習状態をたずねた。アーナンダ尊者は「マツリカー王妃はよく学習されていますが、もう一人の王妃はそうではありません」と答えた。

そこで仏陀は、正しい真理の教えをよく学び、実践する努力を怠ると、ちょうど、香りもしない実もならない花のようになると説かれたのである。

(第 51・52 偈の因縁物語)

53. まこと 摘<sup>つ</sup>み集<sup>あつ</sup>められた<sup>はな</sup>花から<sup>おお</sup>多くの<sup>はなわ</sup>花輪<sup>つく</sup>が作  
 られるように、死<sup>し</sup>ぬべき<sup>そんざい</sup>存在<sup>にんげん</sup>である人間として  
 生<sup>う</sup>まれた<sup>ひと</sup>人は、多<sup>おお</sup>くの<sup>ぜん</sup>善<sup>ぜん</sup>をなすべきである。

Yathāpi puppharāsīmhā / kayirā mālāguṇe bahū  
 Evaṃ jātena maccena / kattabbaṃ kusalaṃ bahuṃ.

As from a heap of flowers many a garlands are made, even so  
 many good deeds should be done by one born a mortal.

※アング国 (Aṅga) の都バツディヤ (Bhaddiya) で  
 ヴィサーカー (Visākḥā) は、国随一の富豪ラム (Ram) を  
 祖父にもつ、名門中の名門ダナンジャヤー家  
 (Dhanañjaya) の娘として生まれた。  
 七歳の時、ヴィサーカーは祖母メンダカ (Mendaka) に連  
 れられて、都におられる仏陀をたずねた。そして、仏陀の  
 説法を聞いて悟りの第一段階である預流果 (Sotāpatti) を得  
 た。  
 ところで、コーサラ国の富豪ミガーラ (Migāra) の一人  
 息子は、両親から早く結婚することをさかんにすすめられ  
 ていた。自由な独身生活を楽しんでいる一人息子は、次の  
 五つの条件を満たした女性となら結婚してもよいと両親に  
 答えた。  
 (1) . 美しい髪をしていること。(2) . 美しい唇をして  
 いること。(3) . きれいな歯をしていること。(4) . きれ  
 いな肌をしていること。(5) . いつまでも若く、たいへん  
 健康であること。

早速ミガーラ夫妻は、バラモンたちにこの理想の女性を探すことをお願いし、大金を手渡した。そしてバラモン達は旅に出た。

サーケタ (Sāketa) という町にやってきたバラモンたちが、川の辺の建物で休憩していた時、美しく着飾ったヴィサーカーが同じ年頃の娘たちといっしょに川へ水浴びに来た。その時突然、黒い雲が空をおおい、激しく雨が降りだし、娘たちは駆け足でバラモンたちのいる建物にキャッキョッ言いながら駆け込んできた。しかし、ヴィサーカーだけが、どしゃぶりの雨の中をゆっくり歩きながら悠然とその建物に入ってきたのである。

バラモンたちはその娘の美しさにたいへん驚くと同時に、五つの条件の内、一つを除いて十分に満たされていることを密かに喜んだ。

そこで、小さい声で「何と綺麗なお嬢さんだろう！」「結婚話が殺到しているんだろうな」「しかし、一つ問題がある」「？」「若さがないってことだよ。どしゃぶりの雨の中をゆっくり歩いていただろう。若さがない証拠だよ」「どこか身体が悪いのかなあ」「それじゃ結婚も難しいね」「そりゃ残念だ」とバラモンたちが雑談していた。

「それは私のことですか？」と彼らの話を黙って聞いていたヴィサーカーがたずねた。「そうです。貴方のことですよ。雨が降り始めた時、皆が駆け出したのにお嬢さんだけがゆっくり歩いてこられた。そのために、美しく着飾った衣装や髪飾りが雨でびしょ濡れになってしまった。何故、ゆっくり歩いていたのかね？」と彼らがたずねた。

「バラモンたちよ、この世界には綺麗に正装した姿で駆け足をすると、誤解を受けやすい方が四人おります」「それは・・・？」「それは、偉大な王であり、王の象であり、僧であり、そして、名門の娘でございます。もし、偉大な王が華麗に着飾った姿で普通の家の主人のように走っている姿

を人々が見たならば、王に対する人気のない批判的な「うわさ」が流れ、誤解されるでしょう。同じことがほかの方にも当てはまります。そして、もう一つの理由で私はゆっくり歩いていたのです。年頃の娘をもつ家族は、よい結婚を願うあまり娘をたいへん大切に育てます。もし、結婚前に娘が走ったり駆けたりして腕や足などを折ったりすれば、それは今まで育ててくれた両親の負担となります。雨で濡れた衣装など、後で家の者たちに乾かさせればすむことです。だから私は、あの時走らなかったのです」

バラモンたちは、彼女の話の静かに聞きながら「ふうん、こんな綺麗な歯を今まで見たことはない。この娘こそ、長い間探し求めてきたミガーラ家の結婚相手だ」と心の中で笑みを浮かべた。

バラモンたちから報告を受けたミガーラ家では、早速使者をたて、ダナンジャヤ家に「ぜひ、そちら様のお嬢様を当家にいただきたい」と申し込んだ。

めでたく結婚の話がまとまり、結婚式の当日、名門中の名門の家から嫁を迎えることになったミガーラ家では、連日連夜、盛大な披露宴が行われた。この騒ぎの間、多忙なミガーラ長者は自分の信仰するジャイナ教の裸行者たちに対する施しが忘れがちとなり、後日、そのお詫びも兼ねて裸行者たちを家に招待した。

ミガーラ家の嫁となったヴィサーカーは、舅のミガーラからこの裸行者たちは「阿羅漢」の悟りを得たりっぱな人たちであると聞かされていたので喜んでその接待役を引き受けた。しかし、招待された裸行者たちが傲慢で恥や罪ということを知らない者たちであったため、ヴィサーカーはその場で接待の役をやめて、自分の部屋に帰ってしまった。

怒った裸行者たちは

「ミガーラ長者よ、あんな嫁などこの家から追い出せ！ 何故、仏陀を信じる娘など嫁にしたのだ！」となじった。「し

かし、アンガ国第一の富豪を祖父にもつ名門中の名門の娘を、今すぐ追い出すことなど私には出来ない相談です」というミガーラの言葉に裸行者たちも沈黙した。

そして、裸行者が引き上げた後、ミガーラは一人でゆっくり食事をはじめた。その時、一人の比丘が食べ物の施しを受けるためにミガーラ長者の家にやって来た。ミガーラは、この比丘を完全に無視した。これを見ていたヴィサーカーは、比丘のところへやって来て「ごめんなさい。今、舅が食べているのは、『残り物』なのですよ」と詫びた。これを聞いた舅のミガーラは激怒して、ヴィサーカーに「今すぐこの家を去れ！」と言い渡した。

しかし、彼女は自分に落ち度があるとは思っていなかった。そこで自分の保証人である八人の長者たちに判断してもらうことにした。最初に舅のミガーラが「私が黄金のお皿で食事をしていると『それは汚いごみだ』とこの嫁が言った。だから私は、嫁に家を出て行ってもらうことにしたのである」と述べた。

次にヴィサーカーが「お義父様が食事をしている時、一人の比丘が食べ物の施しを受けに家の前に立っていたのです。しかし、お義父様はその比丘を完全に無視され、食べ物の施しをなさらなかった。ここに嫁いで以来、私は、お義父様が称賛に値するほどの善い行いをなさらない方であると感じていました。ただ、過去の遺産に胡座をかいて、それを消化しているだけなのです。だから私は、お義父様は「残り物」を食べておられるとお坊さんに言ったのです」と述べた。

この言葉にいたく反省させられた舅は、この嫁に詫びた。そこでヴィサーカーは舅にお願いして、仏陀を招待することを許してもらった。

翌日、仏陀とその比丘たちはミガーラ長者の家に招待され、ヴィサーカーの接待を受けた。舅はその場に参加せず、ジャ

イナ教の裸行者といっしょに別の部屋にいた。しかし、「お義父様、ぜひ、尊いお方の説法をいっしょに聞きましょう」という嫁のたび重なる誘いを断り続けることができず、ついにカーテンの後ろで仏陀の説法を聴聞するという条件で参加した。

そして、仏陀の説法を聞き終えた舅は、悟りへの第一段階である預流果（Sotāpattiphala）を得、以後、ヴィサーカーを自分の母親のように深く尊敬しているという意味から「ミガーラマータ（Migāramātā）：ミガーラの母親」と呼ぶようになった。

年老いてもヴィサーカーは、その若々しさを失わず、多くの子供や孫たちに囲まれ、時々、僧院へ出かけては説法を聞くのを楽しみにしていた。そして、彼女はプッバーラマ（Pubbārama）という名前で有名な僧院を建立し、仏陀に寄進した。

僧院が完成したその夜、ヴィサーカーは子供や孫やひ孫たちといっしょにその新しい僧院にやってきて、喜びの言葉を唱え、子供のようにはしゃぎながらその回りを歩いた。そのはしゃぎぶりを心配した比丘が仏陀に「ヴィサーカーはだいじょうぶでしょうか？」とたずねた。

そこで仏陀は「比丘たちよ、ヴィサーカーは前世からの願いがことごとく成就したので、うれしくてしかたないのだよ」と言われたのである。

（第 53 偈の因縁物語）

54. <sup>はな かお</sup>花の香りは、<sup>かぜ さか</sup>風に逆らっては<sup>ひろ</sup>広がらない。  
<sup>びやくだん</sup>白檀、<sup>タガラ</sup>タガラ、<sup>ジャスミン</sup>ジャスミンの<sup>かお</sup>香りもまたしかり。  
 しかし、<sup>よ</sup>善き<sup>ひと</sup>人の<sup>いまし</sup>戒めの<sup>かお</sup>香りは、<sup>かぜ</sup>風にさからっ  
 ても<sup>ひろ</sup>広がってゆく。<sup>よ</sup>善き<sup>ひと</sup>人の<sup>よ</sup>善き<sup>かお</sup>香りは、  
 すべての<sup>ところ</sup>所に<sup>ひろ</sup>広がっていく。

Na pupphagandho paṭivātameti /

na candanaṃ tagaramallikā vā

Satañca gandho pativātameti /

sabbā disā sappuriso pavāyati

The perfume of flowers does not blow against the wind, nor does the fragrance of sandalwood, tagara and jasmine, but the fragrance of the virtuous blows against the wind; the virtuous man pervades every direction.

55. <sup>びやくだん</sup>白檀、<sup>タガラ</sup>タガラ、<sup>はす</sup>蓮華、あるいは<sup>ジャスミン</sup>ジャスミンの  
<sup>かお</sup>香りより、<sup>よ</sup>よい<sup>おこな</sup>行いをする<sup>ひと①</sup>人の<sup>かお</sup>香りこそ<sup>さいこう</sup>最高  
 である。

Cadanaṃ tagaraṃ vāpi /

uppalaṃ atha vassikī

Etesaṃ gandhajātānaṃ /

siḷagandho anuttaro.

Sandalwood, tagara , lotus, jasmine:  
above all these kinds of fragrance, the perfume of virtue is by  
far the best.

※ある夜、アーナンダ尊者（Anānda）は、一人で瞑想し  
ながら「木の香り、花の香り、根の香り、これらの香りは  
風に流され、四方に広がっていく。風に逆らって広がるよ  
うな香りというものが、この世に存在するのだろうか？」  
と黙想していた。しかし、なかなか答えが見つからず、そ  
こで、仏陀に尋ねたのである。

（第 54・55 の偈因縁物語）

※①：戒律を守り、善い行動習慣をもつ人。

56. このタガラや白檀びやくだんの香りかおはわずかなものだが、  
しかし、<よい行いおこなをする人ひとの>香りかおは、神々かみがみの  
間あいだにも広ひろがっていく。

Appamatto ayam̐ gandho / yāyam̐ tagaracandanī  
Yo ca silavatam̐ gandho / vāti devesu uttamo.

The fragrance of tagara or sandalwood is of little account.  
The fragrance of the virtuous, which blows even among the  
gods, is supreme.



※滅尽定(nirodhasamāpatti)という最高の禪定を得たマ  
ハーカッサパ長老は、ラージャガハ町の貧しい人々が住む  
所へ「たく鉢」に出かけた。  
マハーカッサパ長老は、貧しい人々に、施しをして得るお  
金で買うことのできない有り難い利益をわかち与えたいと  
いう気持ちでたく鉢をしていたのである。  
ところで、神々の世界の王サッカも、ぜひこのような利益  
を得たいと願い、妻のスジャータ (Sujāta) といっしょに  
人間界に降りて来たのである。そして、みすぼらしい服を  
着て、貧しい人に変装し、粗末な空き家を見つけると、そ  
こでマハーカッサパ長老の托鉢を待ったのである。  
しばらくすると、長老がやって来てこられ、食べ物の施し  
をお願いされた。夫婦は、喜んで食べ物を施した。それは  
たいへん豪華な食べ物だったので、長老は不審に思い「貴  
方々は、貧しい人たちではありませんね。何故、このよう  
なことをするのですか？」と二人に尋ねた。夫婦は「いい  
え、私たちは貧しいのです。何故なら、私たちの住む神々  
の世界では、だれかに施しをしたいと思っても、その機会  
はまったくありません。私たちは、施しをして得るお金で  
計算できないほどのありがたい利益を得ることが出来ない  
のです。だから、私たちは貧しいのです。  
しかし、今、それを得ることができました」と答えると、  
マハーカッサパ長老に丁重にお礼をしてその場を去ったの  
である。  
(第 56 偈の因縁物語)

※①：戒律を守り、善い生活習慣をもつ人。

57. 戒律かいりつを身みにつけ、放逸なほざりのない生活せいかつを送りおく、そして  
正しいただ智恵ちえ<sup>①</sup>によって煩惱ぼんのうから解脱げだつしている人ひとの  
歩むあゆ道みちを、悪魔マーラが見みつけることはできない。

Tesaṃ sampannasīlānaṃ / appamādavihāriṇaṃ  
Sammadaññā vimuttānaṃ / Maro maggaṃ na vindati.

Mara can not find the path taken by those who are endowed with virtue, who live mindfully, and have been freed from moral defilements by right knowledge.

※比丘ゴディカ (Godhika) は、世間禅の入定を続けてきたが、病気で入定がうまくいかず、二度も三度も失敗した。ついに六度目の時、カミソリを準備して次も入定が失敗することになれば、このカミソリで自分の喉を切って死ぬ覚悟をした。そして、休む間もなく、再び修行をはじめた比丘ゴディカは、ついに阿羅漢の悟りを得、まもなく亡くなったのである。

死王(Māra) は、比丘ゴディカが死後どの世界に生まれ変わったのか探し回った。しかし、死王は、彼を見つけることができず、しかたなしに仏陀にたずねた。

仏陀は、「比丘ゴディカは、亡くなる前に阿羅漢の悟りを得て、すべての煩惱から解放された。再び輪廻して生まれ変わることはない。死王よ、お前の持てる能力を全部使っても、比丘ゴディカのいる所を探し出すことはできない」と答えたのである。

(第 57 偈の因縁物語)

※①「正しい智慧」とは、あらゆる現象の「無常・苦・無我」を洞察する智慧のことを言う。

58. <sup>おおどお</sup>大通りのごみ<sup>やま</sup>山の中<sup>なか</sup>から <sup>は</sup>蓮<sup>す</sup>華の<sup>はな</sup>花が、<sup>きよ</sup>清<sup>ら</sup>らかな<sup>かお</sup>香りを<sup>はな</sup>放ち、<sup>み</sup>見る<sup>ひと</sup>人の<sup>こころ</sup>心を<sup>たの</sup>樂し<sup>ま</sup>せて<sup>い</sup>生きて  
いるように、

Yathā saṅkārādhānasmin / ujjhitasmim mahāpathe  
Padumaṃ tattha jāyetha / sucigandhaṃ manoramam

Even from the heap of refuse, cast into big streets as of no use, there does the lotus bloom, with pure perfume and satisfying the people's mind.

59. ごみ<sup>やま</sup>山に<sup>に</sup>似た、<sup>む</sup>無<sup>ち</sup>知なる<sup>ぼんぶ</sup>凡<sup>なか</sup>夫の中<sup>ぶ</sup>で、<sup>ぶ</sup>仏<sup>だ</sup>陀  
<sup>で</sup>の<sup>し</sup>弟子は、<sup>ち</sup>智<sup>え</sup>恵をも<sup>も</sup>って<sup>ひかり</sup>光<sup>か</sup>かが<sup>やく</sup>やく。

Evam saṅkārābhūtesu / andhabhūte puthujjane  
Atirocati paññāya / sammāsambuddhasāvako.

So among this rubbish of beings, the mentally blind worldlings, the disciple of the Buddha shines by wisdom.

※仏陀の教えを信じているスリグッタ (Sirigutta) 青年と、ジャイナ教を信じているガラハディナ (Garahadinna) 青年とは友人同士であった。

ガラハディナ青年は、ジャイナ教の裸行者たちから常々「君の友人も我々のジャイナ教に入信してはどうか？」と言われていた。そこで、友人のスリグッタ青年にその話を持ちかけた。

「スリグッタよ、君は仏教を信じているが一体どういう利益のあるのかい？それよりもジャイナ教に改宗しろよ」とガラハディナが誘った。

「じゃあ、君の先生たちは一体何を知っているのかい？」

「すべてさ。過去・現在・未来のすべてさ。そして、他人の考えていることもわかる」と誇らしげに答えた。

「それじゃ、一度その先生たちを私の家に招待しよう」と、スリグッタは言った。

その当日、スリグッタは恭しくジャイナ教の裸行者を迎え「どうぞ、こちらにお座りください」と案内した。そして、裸行者たちは指定された座席に着くやいなや、「ドサッ」とその席の下にある「落とし穴」に落ちたのである。その穴は、汚物でいっぱい満たされていた。スリグッタは、穴の中でもがいている裸行者たちを眺め、「先生たちは、たしか過去・現在・未来はおろか他人の考えていることもわかると言っておられたですね」と言った。

それを見ていたガラハディナは怒りだし、以後、この友人と二週間の絶交をした。

ある日、ガラハディナは仏陀を自分の家に招待したいと申し出た。「これはガラハディナの復讐にちがいない」と感じた

スリグッタは、仏陀に自分がジャイナ教の裸行者たちにしたことを全部話した。

青年の話聞きながら仏陀は、この招待を受けることによって二人の青年は悟りへの第一段階である預流果 (sotāpatti phala) を得る機会になるだろうと洞察した。

そして、仏陀は比丘たちといっしょに復讐の罟が仕掛けてあるガラハディナの家にてかけ、青年が指定する座席に座った。

ガラハディナ青年は、当然仏陀が落とし穴に落ちたと思った瞬間、突然、車の輪のような大きい白い花 (lotus flowers) があらわれ、その花に仏陀が座っていた。

この奇跡を見たガラハディナ青年は、たいへん驚き、すぐに仏陀にあやまった。そこで仏陀は、智恵がなければ正しい真理の教えを知ることはできないと説かれたのである。

(第 58・59 偈の因縁物語)









## 第五 愚者の章 BALA VAGGA (FOOLS)

60. 眠<sup>ね</sup>むられぬ人<sup>ひと</sup>にとって夜<sup>よ</sup>は長<sup>なが</sup>く、疲<sup>つか</sup>れた旅<sup>たび</sup>人<sup>びと</sup>に  
とって道<sup>みち</sup>が長<sup>なが</sup>く感<sup>かん</sup>じられる。正<sup>ただ</sup>しい法<sup>ダシマ</sup>を知らな  
い愚<sup>おろ</sup>かな人<sup>ひと</sup>にとって、輪<sup>りん</sup>廻<sup>ね</sup>の生<sup>しょう</sup>涯<sup>がい</sup>がながく続<sup>つづ</sup>く。

Dighā jāgarato ratti / digham santassa yojanam  
Digho bālāna samsāro / saddhammam avijānatam

Long is the night to the wakeful ; long is the league to the weary; long is rebirth “*samsara*” to the foolish who know not the Sublime Truth.

※ある日、パセナディ王(Pasenadi)が、町に出かけた時、窓際に立っている婦人に「一目ぼれ」をした。そして、宮廷に帰るや家臣にこの女性を調べさせると人妻であった。それでも諦め切れない王は、じゃまな夫を宮廷に召し抱え、そして、不可能な仕事をこの夫に命じて殺すことを考えた。その仕事とは、ここから約 12 マイル離れた所へ行かせ、クムダ(kumuda)という花とナーガス(Nagas)という竜が住む所にあるアルナヴァティー(Aruṇavatī)という赤土を、王が沐浴する夕方までに宮廷に持ち帰ってくるという一日仕事であった。「もし、時間に間に合わなければ死刑にするぞ！」と王から厳命された夫は、早速、妻に弁当を作っ

てもらい出発した。その途中、腹がすいた夫は、川のほとりで偶然出会った旅人と一緒に妻の作った弁当を食べた。そして、残ったご飯を川に住む竜神に施し、大声で「この川に住んでいる竜神よ！ 私の願いを聞いてください。パセナディ王は、私の妻を奪うために無理難題な仕事を命じました。私を助けると思って、どうぞ、クムダの花とアルナヴァティーという赤土を持ってきて下さい」と三度叫んだ。

この悲痛な叫び声を聞いた竜神は、老人に姿を変え、夫の望むものを手渡した。無事に仕事を成し遂げた夫は、又、王から新たな難題を命じられるのを避けるため宮廷をこっそりぬけだし、僧院をたずねて、そこでゆっくり眠りの床についた。

パセナディ王は、自分の思惑通りにならなかったあの夫を夜明けと共に殺し、その妻を奪い取る計画を立てたため興奮してなかなか寝むれなかった。そして、真夜中に、王は恐ろしい声を聞いた。……銅釜地獄 (Lohakumbhī Niraya) に生まれ変わった四人の男が、沸き立つ銅釜の中で煮られながら「ド」(Du)・「サ」(Sa)・「ナ」(Na)・「ソ」(So)と一音発しては下に沈んでいくのである。……王は、怖くなった。

「これはたいへん不吉な声だ！ わが命があぶない」。

翌朝、早速王は占い師を呼んで昨夜の夢について相談した。「王様！ これはたいへん悪い卦でございます。しかし、私の言うとおりにすれば、たちまち悪い卦がよい卦に変わります。そのために、まずそれぞれ百の数の象・馬・牛・鶏・豚・少年・少女たちを生け贄として、神に捧げてください。そうすれば、王様の命は助かります」と占い師は言った。そして、パセナーディ王が生け贄儀式の準備をはじめると、国中に嘆きの声わき起こった。これを聞いた王妃マツリカー (Mallikā) は、馬鹿げた占いによって多くのものが不幸になるような愚行をやめさせるため、死の影におびえる

王を仏陀のところへ連れていった。

そこで仏陀は「王よ、昔、四人の富豪がいた。彼らは遊び友達であり、お金にものをいわせて、うまい酒や豪華な料理を食べ、人妻と遊ぶという生活をして人生を終えた。そして、死後、この四人は銅釜地獄に生まれ変わった。この地獄は、とてつもなく大きく、三万年かかってその釜の一番底に達し、さらに三万年かかって釜の口にとどくというもので、四人は釜の口にとどいた時、偈の一節を唱えようとしたが「ド」「サ」「ナ」「ソ」という各偈の一音だけ発して、又、釜の底に沈んでいき、地獄の苦しみを味わうのである。」

仏陀の説法を聞いた王は、他人の妻と寝ることの恐ろしさ  
と一夜の長いことを知り、大いに反省したのである。

(第 60 偈の因縁物語)

61. ひとり<sup>しゅぎょう</sup>修行の旅<sup>たび</sup>に出て、自分<sup>じぶん</sup>よりまさり、<sup>また</sup>又は、  
自分<sup>じぶん</sup>と等しい人<sup>ひと</sup>に会<sup>あ</sup>うことなければ、むしろ  
断固<sup>だんこ</sup>として 自分<sup>じぶん</sup>ひとりで修行<sup>しゅぎょう</sup>をすべきである。  
愚<sup>おろ</sup>かなる人<sup>ひと</sup>を、修行<sup>しゅぎょう</sup>の友<sup>とも</sup>とするなかれ。

Carañce nādhigaccheyya / seyyaṃ sadisamattano  
Ekacariyaṃ daḥamā kariyā / natthi bāle saḥāyatā.

If a person seeking a companion cannot find one who is better than or equal to him, let him resolutely go on alone; There can be no companionship with a fool.

※マハーカッサパ長老 (Mahākassapa) に二人の若い弟子がいた。一人は師匠であるマハーカッサパをたいへん尊敬し、教えをよく学び、深い信仰心をもっていた。しかし、もう一人はそうではなかった。信仰深い弟子が師匠のために洗面の準備をすると、これを見ていた信仰心のない弟子が、急いでマハーカッサパ長老の所へ行き「師匠、洗面の準備ができました」と言った。

ある日、信仰心のない弟子は食事の後、昼寝をした。その間、信仰心のある弟子は、師匠の沐浴の準備のためにお湯を沸かし、湯気だけを残してお湯を別の部屋に移した。昼寝から目を覚ました信仰心のない比丘は、その湯気を見て「師匠、沐浴の準備ができました」と伝えた。早速マハーカッサパ長老がやって来ると、そこには水やお湯などはなく、湯気がたっているだけだった。

それからしばらくして、信仰心のない弟子は、師匠の信者の家をたずね、師匠が病気のため代わりに来たと言った。そして、家の人々からいろいろな見舞いの食べ物を施してもらい、帰り道、それを食べた。

後でこれを知った師匠は弟子を叱ったが、逆に、この弟子はたいへん腹を立てた。翌日、師匠がたく鉢に出かけている間に、彼は師匠の壺やお皿などを壊し、お寺に火をかけて遁走した。そして、死後、地獄に落ちたのである。

この話を聞いた仏陀は「このような馬鹿な弟子といっしょに修行するよりも、一人で修行している方がはるかによい」と説かれたのである。

(第 61 偈の因縁物語)



## あとがき

本書の作成にあたり、世界平和パゴダ僧院長ウ・ウェープラ (Ven.U Vepulla) 大僧正先生から多大なる御協力を賜りました。詩偈の翻訳は、ウ・ウェープラ先生の直訳に、ほぼ基づき、日本人向けに多少私なりの言葉使いをさせていただきます。更に、参考資料の指示、詩偈の背景となった物語の要約についての監修、教義面での教授、全体的な校正にも細心の御指導をいただきました。行学兼備で厳格な上座部仏教僧でおられるウ・ウェープラ先生との出会いを通して、本書が、多少なりとも充実したものに成り得たと思います。又、米国・シカゴ大学神学校に在籍、日本文化を研究されている神戸在住の翻訳家ジョナサン・ターボックス (Mr. Jonathan Tarbox) 氏から、英語の面のご指導を受け、詩偈を読みやすい表現にいただきました。そして、本書の基礎資料の一つであるスリランカ版「ダンマパダ」を書かれた故ナーラダ大僧正がおられたヴァジララワ寺院のスガタナンダ長老 (Ven. W .Sugatananda) や、古い友人の一人で熱心な仏教徒である実業家ソーマラトナー家 (Mr&Mrs .S.A.Somaradne and their son Lochane) から貴重な本を、ガンガラマ寺院の比丘パンナロカ師 (Ven.M.Pannaloka) から自らパーリ語で録音してくださった「ダンマパダ」のカセットテープを、又、仏教書発行協会 (Buddhist Publication Society) のビク・ボディ師 (Ven. Bhikkhu Bodhi) からは、自筆の小冊子「ダンマ・パダ」を賜りました。同師の師匠でおられるナーナポニカ長老 (Ven Nānaponika) や、すでにカンボジア国やラオス国で「ダンマパダ」を出版されている仏教奉仕会 (Buddhist Relief Mission) の川崎さんご夫妻 (Ken & Visakha Kawasaki) からも助言をいただきました。その他多くの方々の暖かいご支援ご協力によって、最初は簡単な日本語訳の小冊子と考えていた本書が、このような形で発行できましたことを心より感謝します。本書の出版をご快諾くださいました塚田印刷 (株) に感謝の意を表します。

1992年10月2日

編集・発行者しるす

## 主な参考資料

1. Nārada Maha Thera: The Dhammapada(pāli text and translation  
with stories in brief and notes) Reprint -1984, Sri Lanka
2. Daw Mya Tin , M.A.: The Dhammapada(verses and stories)  
Burma Pitaka Association, Reprint - 1987, Japan,)
3. E.W.Burlingame: Buddhist Legends, translated from the original  
Pāli text of the Dhammapada Commentary : (Harvard Oriental  
Series, vol.28 - 30), The Pali Text Society - 1990, England.
4. A Handbook of protection Sri Lanka,
5. Buddhist Stories Part 1 - 3 from the Dhammapada commentary(selected  
& revised by Bhikkhu Khantipalo) Buddhist Publication Society - 1982,  
Sri Lanka,
6. J.R.Carter & M.Palihawadana: The Dhammapada , Oxford  
University Press -- 1987, U, S , A..
  
7. ウ・ウェープラ：南方仏教基本聖典 中山書房仏書林
8. ウージョターランカーラ：南方上座部仏教の教え 世界平和パゴダ
9. 水野弘元：パーリ語辞典＜二訂＞ 春秋社
10. 水野弘元：パーリ語文法 山喜房佛書林
11. 水野弘元：仏教の基礎知識 春秋社
12. 水野弘元：仏教要語の基礎知識 春秋社
13. 藤吉慈海：法句経 真理のことば 大蔵出版
14. 宮坂宥勝：真理の花たば 法句経入門 筑摩書房
15. 中村元・増谷文雄監修：ジャータカ物語 鈴木出版
16. 前田恵学：原始仏教聖典の成立史研究 山喜房佛書林
17. 中村元：真理のことば 岩波書店

「お布施者ご芳名」

(第1回増刷時：2024年9月30日まで)

増刷にあたりまして、以下の方々よりご喜捨を頂きました。

増刷の印刷出版経費でご使用させていただきます。

心より感謝申し上げます。

皆様の法施が涅槃証悟への強い縁となりますように、お祈り申し上げます。

<ご喜捨頂いた方々：17名>

アカヤマ 様

高橋 真一 様

佐藤 ひろ子 様

H・A 様

藤井 様

北川 美幸 様

田崎 和美 様

平野 様

伴 久仁彦 様

K・T 様

H・K 様

Prabhath 様

M・O 様

Y・K 様

他、匿名3名 様

ダンマパダこころの清流を求めてを広める会 星澤康孝

kokoronoseiryu423@gmail.com

この本は無料にて配布いたします。

2024年10月吉日



# こころの清流を求めて

-上座部仏教比丘たちのご指導による日常生活の中の仏陀の教え-

パーリ語 『ダンマパダ』 その（一）

---

発行日  
協力・監修  
編集・発行  
発行所

2024年10月9日  
ウ・ウェーブッラ大僧正  
北嶋泰観  
悟り出版 (Satori Vihara)

〒355-0077  
埼玉県東松山市上唐子 1330-1  
携帯電話 : 080-4059-5170  
固定電話 : 0493-889-567

印刷所

株式会社イシダ印刷

〒534-0021  
大阪府大阪市都島区都島本通  
1-2-11  
TEL : 06-6753-9955  
<https://www.lowcost-print.com/>

---

